
殺人予告者

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人予告者

【Nコード】

N2430F

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

私の名前は神村律子。八王子市にある大学の学生。私の親友中津法子が、奇妙な手紙を受け取った。単なる悪戯と思われたその手紙が、本当の殺人事件の発端になってしまう。法子の推理が冴える。犯人は果たして誰なのか？

プロローグ 謎の招待状 10月10日

この日は、まさしく生涯忘れられないような体験の始まりの日であった。

私の名前は、神村律子。八王子の某私立大学の法学部の2年生である。えっ？ 美人なのかって？ ノーコメント。ご想像にお任せします。まア、強いて言えば、指を差されて笑われるような顔はしていないかな。

さて、そんな私には、とても変わった友人がいる。その娘の名前は中津法子。彼女もまた、私と同じ大学の法学部に在籍する女の子である。え？ その娘は美人かって？ 他に訊くことないの？ うーん。彼女はもうそのなんて言うか、天が二物どころか、三物くらい与えてしまったんじゃないかっていうくらいの娘なのだ。

つまり、才色兼備。その上、スポーツ万能、バイクも車も、果てはジェットスキーまでも乗りこなすスーパーレディである。えっ？ 何？ 近寄り難いつて？ そんなこと、全然。彼女はすごく気さくな女の子だし、明るいし、変に気取ったところもないから、才女にありがちな、嫌味な感じは皆無。普段は少しポンヤリして見えるくらい、性格は穏やかなのよね。

法子は、法学部に在籍しているせい、それとも生まれつきなのか、犯罪学と犯罪心理学にとっても興味を持っていて、本来なら、4年生になってから受ける講義なのに、そ知らぬ顔で受けているのである。私もついついその人の好きからつき合っつて、訳もわからないまま、2つの講義に出ていた。

そんな彼女だから、好きな読み物はもちろん推理小説。日本のミステリーは言うに及ばず、ポオ、ドイル、ルブラン、クイーン、クリステイー、カー、ヴァン・ダインと、推理小説の黄金期を飾る傑

作はほとんど読んでいた。私もその影響で、すっかり推理小説オタクと化してしまっている。

彼女と私は、性格は全く違うのだが、妙に気が合っている。高校まで別々だったのに、何年も前からの親友のように仲がいいのだ。だから、彼女から電話で、急いでアパートに来て、と言われた時は、二つ返事で出かけて行った。まさか、あんなことに巻き込まれるとは夢にも思わずに。

法子が住んでいるのは、日野市と八王子市の境付近にある、洋館風の洒落た造りのアパートである。都心から遠いためと、大学生向けに造られたため、六畳間と四畳半、バストイレキッチン付きで家賃が5万円とは、格安である。

法子の実家は、世田谷の祖師谷にあるので、そこから通おうと思えば通えるのに、彼女は電車で長時間乗るのが嫌で、わざわざ大学のそばに引っ越したのだ。

アパートは女子のみ入居可で、法子の両親も少しは安心して娘の独り暮らしを許可したようだ。

しかも建物の周囲には高い塀があり、中を覗こうにも覗けないようになっている。これなら確かに安心だ。それに比べて、私のアパートのデングジャラスなこと。(しかし、田舎の両親は私の身の危険なんて考えてもくれないのだ！)

「お邪魔します」

私は、きれいに靴が並べられた玄関に入り、パンプスを脱ぎながら言った。法子はそんな私をニツコリとして見ていた。

「早かったね、律子」

彼女はよく通るその声をまるで惜しまずに使って言った。

「まあね。ちょうどいい時間のバスがあったのよ」

私も負けずに通る声(のつもり?)で答えた。よく見ると、法子はまたきれいになったような気がした。

長い髪をポニーテールにし、前髪を少し垂らし、耳には後れ毛が

かかっている、女の私もゾクツとするほどだった。でも彼女は全然自覚症状がなく、「私は男に生まれるはずだったのかもね」とか言っているくらいだ。

確かに、服装に関して言えば、彼女はあまり女の子っていう感じを抱かせるモノは着ない方かも知れない。どちらかと言うと、スーツ系が多いし、今日みたいに彼女の部屋で会ったりする時は、トレーナーにジーンズという格好がほとんどである。

「座って。今、コーヒー入れるから」

彼女は、キッチンの方へ歩を進めながら、私にクッションを投げて寄越した。私はそれを受け取ると、フローリングの床の上に置き、腰を下ろした。

「ねエ、わざわざアパートに来てって、何があったの？ 彼でも来るの？」

私がいたずら心を起こして冷やかし半分に尋ねると、法子はニコしながらパーコレーターとコーヒーカップをトレイに載せて戻って来て、

「だといいんだけどね。違うのよ」

「そうなの。一体何？」

私が興味シンシンの顔で再び尋ねると、法子はトレイをガラスのテーブルに置いてから、

「実はこんなものが私のところに届いたのよ」

とテーブルの下にあったレターケースの中から、一通の封筒を取り出して、私に手渡した。

「何これ？」

封筒は茶色で、色気なんてまるでない。どう見ても市役所とか大学とかから来た、事務的なものしか見えなかった。法子はコーヒーをカップに注ぎながら、

「差出人を見て御覧なさいよ」

と言った。私はチラッと法子を見てから、封筒を裏返した。

「あっ！！」

私は思わず大声をあげてしまった。差出人は、「殺人予告者」とプリントされていたのだ。

「何よ、これ!？」

私は封筒を見たり、法子の顔を見たりして尋ねた。法子はパーコレーターをトレイに戻して、

「とにかく、中味に目を通してみてよ」

「うん」

私はドキドキする心臓の鼓動を感じながら、封筒から便箋を取り出した。それは四つ折りになっていた。私は恐る恐るそれを開いた。便箋にもやはり、パソコンでプリントされていた。

「『中津法子殿へ

貴殿の名推理ぶり、よく拝聴しております。しかし、これから朝比奈家で起こりますところの事件、貴殿に解決できますか?』

何なの、一体?」

私は他に言うことがないのかというくらい、同じようなことばかり口から発していた。

確かに法子は、とてつもなく優れた推理力と分析力を持っている。現に彼女は、何度か事件に関わり、解決したこともある。群馬県の榛名山で起こった首なし死体事件や、世田谷で起こった温水プール溺死事件などだ。しかし、そのことを知っているのは、ごく限られた人達なのである。つまり、それを知っているということは、法子のことを知っている人間が、こんな大胆な予告状を作ったということになる。

「どう思う、律子?」

法子は少しも動じていないようだ。ニコニコしながら、コーヒークップを口元に運んだ。私は呆然としていたが、やっと、

「どう思っつて、これって、殺人予告状じゃないの? 大変なことよ」

「そうね」

法子は私から封筒と便箋を受け取りながら答えた。そして、

「この便箋にプリントされた文章と、封筒の表の私の住所と名前は、誰の仕業か、おおよその見当はついているわ」と言っただので、私はまた呆然とした。

「だ、誰なの、こんな予告状を出したのは？」

「慌てないで、律子。順序立てて説明するから。まず、この封筒の差出人の『殺人予告者』のところをよく見て」

「えっ？」

法子に言われて、私はもう一度差出人のプリントを見た。少し擦れているというか、歪んでプリントされている。

「これ、どういうこと？ プリントに失敗したのかしら？」

私は法子に目をやって尋ねた。法子は真剣な目をして、

「そうね。それも考えられるわ。でも可能性はもう一つあるのよ」「もう一つ？」

私はオウム返しにしかものを尋ねられなくなっていた。法子は封筒をパンとテーブルの上に置き、

「擦れたり、歪んだりするのはわかっていただけ、それしか方法がなかったということ」「どうということ？」

私はすっかり法子の分析話に引きずり込まれていた。法子は便箋を畳んで封筒に入れ、

「封筒に便箋を入れて封をしてから、プリントしたかも知れないのよ」

そこまで言われて、私はやっと法子が言わんとしていることに気づいた。

「つ、つまり、”殺人予告者”とプリントした人物と、便箋にプリントした人物は同一人物ではないってこと？」

「あくまで可能性よ。何の証拠もないんだから」

法子はまた一口コーヒーを飲んだ。そして、

「話をもとに戻すわね。ではこの予告状をプリントし、私宛に手紙を出そうとしたのは誰か？」

もうわかるでしょ？」

「あっ！」

さすがに鈍い私でもわかった。そうか、そういうことか。

「朝比奈裕子先輩。我が愛すべき推理小説同好会の代表！」

私は得意満面で答えた。法子もニッコリして、

「御名答。そういうことよ」

一つの謎は解けた。朝比奈裕子とは、同じ大学の4年生で、私達が所属する推理小説同好会の発起人であり、代表である人だ。だがここで新たな謎が出て来た。

「ねエ、法子、だとしたら、”殺人予告者”ってプリントしたのは、先輩じゃないのよね？」

「そうね」

「じゃ、一体誰なの？」

「わからないわ。今のところはね」

「今のところは？」

私がキョトンとして尋ねると、法子は、

「朝比奈先輩に会って、確かめてみればわかることよ。そうすれば、これがただのいたずらかさうでないかわかるわ」

「そうでないかって……？」

私はビクビクしながら上目遣いで法子に尋ねた。彼女は真剣な顔になって、

「本当に殺人事件を起こそうとしている人物がいるってことよ」

「そ、そんな……」

私は血の気の引く思いがした。法子に関わって、私は今まで何度か事件に遭遇している。何か嫌な予感がして来た。すると法子は私の顔色が変わったのに気づいたらしく、

「まだそうと決まった訳じゃないわよ。とにかく、先輩の家に行ってみましょ」

「え、ええ……」

私は半分失神状態で返事をしていた。

話は何日か前に遡ることになる。

東京は東西に長いところである。都心では雨でも、多摩地区では雪、ということが多い。

八王子市は山梨県側にある市だが、国道16号線や20号線、中央高速や圏央道などが集まる交通の要所であるため、車が渋滞する、ドライバーにとっては厄介なところである。

その八王子市の日野市寄りで多摩市寄り、つまり東南の一角にその屋敷はある。建て坪200坪を超える、化け物屋敷のような洋風の家だ。言うまでもなく、それが朝比奈家である。

その朝比奈家の当主は、朝比奈長次郎と言う。法子と私は、裕子先輩を訪ねて行って、何度か顔を合わせている。先輩の父親にしては随分と年をとっているという感じが否めないほどである。髪は真っ白、口髭も白。皺も多く、笑うとその数が倍になりそうだ。しかし、その反面、目は鋭い。

もちろん、その鋭さには理由がある。

彼は日本有数の企業グループの総帥であり、政界にも睨みを利かせている、いわゆる「首領」なのだ。しかし普段はそれほど威圧感のある雰囲気はない。むしろ裕子先輩に対しては、親バカぶりを発揮する、その辺のオヤジである。

その長次郎翁が倒れた。9月の初めであった。過労のためとの医師の診断であったが、翁は万一のことを考え、顧問弁護士の高林明

夫氏を呼び寄せて、遺言状を作成させた。翁は自分がすぐ死ぬとは思っていなかったが、自分の家族の醜い遺産の争奪戦を憂えてのことであった。そんなことを心配しなければならぬほど、翁の家庭は荒れていた。その原因を作ったのは、翁自身であったが……。

翁は5回も結婚している。そのうち、裕子先輩の母親である江威子さんには死に別れているのであるが、あとの三人とは離婚している。

現在いる奥さんは五人目で、松子と言う28歳の女性である。翁は今年で70歳になるが、奥さんの方はどんどん年令が下がっている。一人目の政代が63歳、二人目の伊久子が45歳、三人目の江威子さんが生きていれば43歳、四人目の則美が39歳という具合である。

また、彼女達との間にできた子供だが、裕子先輩以外に二人いる。一人は、政代との間にできた、浩一と言う40歳の男である。この男、一見ニヒルな二枚目であるが、実はいつも裕子先輩をいじめ、家から追い出そうとしている嫌々な男で、裕子先輩も浩一のことを嫌っている。このオツさん、未だに独身で、しかもクラブのホステスに入れ揚げてるって話だ。ホント、やアね、男って。

そしてもう一人は、伊久子との間にできた24歳になる礼子である。彼女は美人であるが、それと引き換えに優しさと労りをどこかに置いて来てしまったような女で、浩一同様、陰険で執念深く、翁に一番可愛がられている裕子先輩をひどく煙たがっている。

そんな二人の兄と姉に囲まれて育った先輩の辛さと言ったらなかつたろう。またこれが似合ってるんだな。裕子先輩は薄幸の美女という活字をバーチャルリアティーの世界で表現したとしたら、まさにこんな女ひとという雰囲気の人なのだから。

でも実際には先輩はすごくしっかりしているから、シンデレラのような感じはしない。

末っ子は一番可愛がられると言つが、先輩が可愛がられるのには、理由があるのだ。当然母親の江威子さんが亡くなったのも、理由の一つであろう。しかしそれ以上に翁にとって裕子先輩は可愛かったのだ。実は江威子さんは、翁が愛したただ一人の女性だったのだ。だからこそ、その忘れ形見である裕子先輩は可愛いのである。

えっ？ 普通それほど愛した女性と死に別れたら、もう一度結婚したりしないって？

そ、そりゃそうよね。だからね、四人目の奥さんの則美とは、ほとんど打算で結婚したわけ。江威子さんが亡くなったのは、裕子先輩が三歳の時で、母親が必要と考えたからなのよね。

でも則美自身も打算で結婚していたから、彼女は母親として振る舞うことなんて決してなかった。朝比奈グループの総帥の夫人として君臨したかっただけなのだ。だから翁は莫大な慰謝料を支払って、すぐに則美と離婚した。

そして長い間、翁は独身を通して来た。

したがって、裕子先輩は家政婦の三池悦子という女性に育てられた。彼女は江威子さんと共に江威子さんの家の家政婦の中から選ばれて、朝比奈家に来ていたので、裕子先輩にとっては、まさしくうってつけの乳母だった。

そして一年ほど前、翁はグループの会議に出席し、松子と出会った。彼は驚いた。松子は亡くなった江威子さんに生き写しだったのである。翁はすぐに松子の素姓を調べさせた。彼女は子会社の社長秘書であった。翁はその社長に会い、松子と会って話したい旨を告げた。社長は信じられないほど大喜びをし、松子を翁に引き合わせた。

翁は自分の年令も顧みずに、松子に求婚した。松子は初めは嫌が

っていたが、やがて翁の熱意に絆され、承諾した。そしてその後、子会社の社長がグループの重役のポストに就いたのは、偶然ではなからう。

確かに松子は江威子さんによく似ていた。彼女は、ある貿易会社の社長の娘であったが、会社が倒産して、父親が自殺し、母親がその後を追うように病死したため、会社を吸収合併した朝比奈グループの子会社の秘書になったのである。何となくはかなそうな感じが裕子先輩に似ているが、松子は実際はかない感じの強い人である。

長次郎翁は、9月の下旬にはすっかり復調し、退院した。松子に付き添われ、少し右足を引き摺るような状態ではあったが、紺の着物をきつちりと着こなしている姿は、他者を圧倒するパワーを感じさせた。

「松子」

翁は松子の顔を見ずに、邸の玄関の扉を見つめたまま言った。和服姿がしっとりとした感じを醸し出している松子は、ハツとして翁を見上げ、

「はい、貴方」

と答えた。翁はその時初めて松子に目をやり、

「浩一と礼子を呼べ。僕の部屋に来るようにな」

「はい、わかりました」

松子は静かに頭を下げた。翁は玄関の扉を運転手が開くのを確認し、中に入って行った。

朝比奈邸には全部で7人しか住んでいない。部屋の数30室、バスルーム3室、図書室、ワイン倉庫と、迷子になりそうなくらい大きいのに、たった7人はあまりにも寂しかった。

今まで紹介して来たのは、全部で6人。あともう一人はと言うと、朝比奈家の広大な庭園と温室を管理している山本喜六と言う白髪の

老人である。彼は翁が少年の頃から朝比奈家に仕えている。当然結婚はしていない。そういう人間がたくさん存在している時代に生まれ育った人なのだ。だから自分のことを不幸な男だとは思っていないらしい。

その広大な庭園の一角に、ネットが張ってある場所がある。ゴルフの練習用のものようだ。そこでクラブを振って、ネットに向かってボールを打っているのは、浩一である。それを少し下がった位置から軽蔑したような目で見ているのが、礼子である。

「お父様、すっかりお元氣になったそうよ」

あまり嬉しくないことを話すように、礼子が口にする、浩一も苦々し気な顔で打つのをやめて、

「あのオヤジの生命力の強さ、一体何だろうな。信じられないぜ」

「まア、それじゃまるで、お父様が亡くなるのを待っているみたいじゃないの、お兄様？」

礼子はわざとらしく驚いてみせた。浩一は礼子をチラッと見てから、

「お前だつてそうだろう、礼子？」

と言い、ニヤリとした。礼子はフツと笑って、

「ま、そうだけどね」

浩一はクラブをバッグの中に戻すと、

「とにかく、親父は遺言状を高林に作らせたんだ。そいつを何とかして手に入れて、内容を確かめたい」

「そうね。内容によっては……」

礼子が意味ありげに言葉を切ると、浩一は鋭い目つきで礼子を見て、

「遺言状を灰にしてやる」

「となれば、民法の規定に基づいて、分割が行われるわ」

礼子もしたたかな顔になった。浩一は大きく頷き、

「そうしたら、あの女は脅かしてこの家を追い出す。親父が死んだ

ら、この俺が朝比奈家の当主であり、グループの総帥だからな」
「そうなれば、お兄様も晴れてあの女を呼び寄せることができるわね」

礼子がクスツと笑って言うと、浩一はキツとして、

「うるさい！ お前には関係のないことだ！」

と怒鳴った。礼子はペロツと舌を出して、

「おお、怖い」

と肩を竦めた。浩一はムツとしてまた何か言おうとしたが、そこへ松子が現れたので、口を噤んだ。

「浩一さん、礼子さん、お父様がお呼びです。お部屋にいらして下さい」

松子は二人の様子に気づいたのか、少し恐る恐る言った。

「わかった」

浩一は答え、邸に向かったが、礼子は松子をキツと睨んだだけで何も言わずに立ち去った。松子もしばらく二人の後ろ姿を見ていたが、やがて歩き出した。

長次郎翁のいる部屋は、邸の正面から向かって左手にある。ゴルフ練習用のネットがあるのはそこから少し左奥で、さらにその奥にはプールもある。浩一と礼子は、翁の部屋に隣接してあるサンルームに向かっていた。

「狸オヤジめ、何を企んでいやがるんだ？」

礼子はそんな浩一を後ろからニヤニヤしながら眺めていた。

やがて二人はサンルームの前に来た。翁は部屋からサンルームに移っており、デッキチェアの一つに腰を下ろし、目を閉じて何かを考えているようだった。浩一はそれに気づいて少し緊張気味に、サンルームの扉を開いた。その音に翁は目を開き、浩一と礼子を見た。
「来たか、二人共。まア、座れ」

浩一と礼子は、それぞれ別のデッキチェアに腰を下ろした。二人

はその間ずっと、翁の顔を見たままだった。

しばらくの間、沈黙の時間が流れた。翁は浩一と礼子の顔をジッと見ていたが、やがて、

「お前達も知っているように、儂ももう年だ。いつコロリと逝くかわからん。そこで遺産のことを話しておこうと思う」

浩一は唾を呑み込んだ。礼子も居ずまいを正し、翁を見つめた。

翁は二人を交互に見て、

「お前達にはビター文金はやらん。そのこと、よおく頭に叩き込んでおけ」

と言い放った。

「な、何だとオツ!?!」

浩一は猛然として立ち上がった。彼の顔は怒りで真っ赤になっていた。

「どついうことなの、お父様!?!」

礼子も唇を震わせて怒鳴った。翁はそんな二人の反応をまるでわかっていたかのように冷静な顔のまま、

「決まっておる。儂の全財産は、松子と裕子の二人に与えるからだ。儂の家族はあの二人だけだ」

「くそっ!」

浩一は思わずデッキチェアの肘掛けを拳で叩いた。その凄まじさで皮が裂け、血が出た。

「いいでしょう。しかし、そう思い通りにいきますかね。遺言状さえ手に入れば、こつちのものだ。必ず遺言状を手に入れてみせますからね」

浩一は血の出ているハンカチを手で押さえながら、口をヒクヒクさせて言った。

「私もよ、お父様!」

礼子も勢い良く立ち上がった。翁はそんな二人を哀れむような目で見て、

「好きにするがいい」

と呟いた。浩一と礼子は翁を睨み付けたまま、サンルームを出て行った。

「貴方……」

その様子をいつから見ていたのか、松子が部屋から入って来て、震える声で言った。

「案ずることはない。あいつらには、何もできはせんよ」と翁は松子を見て言った。

第二章 法子、朝比奈家に行く 10月10日

さて、法子と私は裕子先輩に真相を確かめるために、朝比奈邸に向かうことになった。

「バスで行く？」

私は思わせぶりに言った。というのは、法子はアパートの駐車場に、愛車のスターレットを置いているからだ。

彼女の車に乗るのは実に楽しい。と言うより少し怖い。とにかく法子の運転は、私のような車オンチのペーパードライバーには、凄まじいの一語に尽きるものなのだ。

「私の運転が怖いから、車で行くの嫌なんですよ？」

法子はニツコリして尋ね返して来た。私は首を横にブルブル振りながら、

「とーんでもない。そうじゃないわよ。たださ、朝比奈邸って、門のところガードマンがいるでしょ？」

「それがどうかしたの？」

法子は全く意に介さないという感じだ。私は肩をすくめて、

「まア、それは冗談なんだけどさ。今日はおとなしい運転にしてくれる？」

と少しお願いするような仕草と声で言った。法子はクスツと笑って、

「そうねエ、前向きに善処しましょ」

「国会の答弁みたいなこといわないですよ」

私はちよつと剥れてみせたが、法子は微笑んで何も言わなかった。

「さアて、出かけましょうか」

法子は早速何着も持っているスーツの中から、ネイビーブルーのものを選んで着ると、そう言った。

ところで、理由はわからないのだが、法子はスカート履かない。尋ねてみようと思ったりもするのだが、余計なお世話だとも思えるので、いまのところ訊くつもりはない。

彼女はまさにスーツのペストドレスだ。どんな色でどんな模様のものでも、すんなり着こなしてしまう。私のような不精者には決してできない芸当だ。と言うよりは、私の容姿がそれを許さないだけかも。あーあ。

そして髪はポニーテールだが、少しはブラッシングしたらしく、さつきよりは整っているようだ。

「やっぱり、車？」

私は怯えたように尋ねた。法子はニコニコしながら、

「今日は飛び切り張り切って運転しちゃおうかしら？」

「や、やめてよ！」

私はムキになって言った。法子はケラケラ笑って、

「まア、律子が大声を出さない程度の運転にしときましようかね」

「た、頼むわよ」

私は車に乗る前から、すでに酔っていた。

私と法子がいるのは、日野市寄りの八王子市である。朝比奈邸があるのは、ここからやや南西になる。距離にすれば、ほんの数キロなのだが、このあたりは小高い丘があり、回り道になるところが多い。

「やっぱりさ、ブナンな線で大学の前を抜けて、野猿街道に出るのがベストなんじゃないの？」

私がナビゲーターよろしく進路を指摘すると、法子はイグニッションキーを回しながら、

「そっちより、多摩テック経由の方が、近いんじゃない？」

「えっ？」

私は一番恐れていたことが起ころうとしているのに気づき、身をこわばらせた。

「そうね。やっぱり、それ行きましょ！」

「えーっ……！」

私のナビゲーションなど、あってもなくても同じなのだ。法子は

ニコニコしながら、アクセルを踏み込んだ。

「きゃっ!!」

車はターボ車である。心地よいGを通り越した、気持ち悪いGが私の身体を助手席に叩き付ける。

「法子オツ!!」

「何よ、もう叫んでるの?」

法子の左手がまるで手品師のごときスピードで動き、車はいつの間にか、五速で走っていた。

「さア、この信号はこのまますすぐ!」

「きゃあッ!!」

スターレット君は大きくバウンドして多摩テック前を通り、タイヤをきしませてカーブを曲がった。問題はここから。道は次第に狭くなり、気をつけないと対向車とガツチャンコである。

「法子、少しは対向車のことを……」

「わかってるわよ」

法子はニコニコしながら、本当に水を得た魚のようにハンドルをきる。私は顔がひきつるのを感じながら、

「ハ、ハハ、ハハ……」

と涙目を擦った。

道路地図を作ってる会社、恨むぞ! この道の幅と、大学の前の道の幅を同じにして! そのせいで私は、この道を法子に教えてしまったんだから! 実際は半分よ、半分! どーしてくれんのよ! ? 何とか狭い道を抜けきった私達は、野猿街道に出た。昔はその名のとおり、猿がうるついていたらしいが、今ではもうその面影はない。

「この次の信号を右よね、ナビゲーターさん?」

と突然法子が尋ねた。私はハツとして、

「そ、そうよ。もうすぐね」

と少し吐き気を催しながら答えた。

「あっ、見えて来たわ」

私は右手前方の、少し小高くなっているところに見える、巨大な洋館を指差して言った。法子もそちらをチラッと見て、

「そうね。裕子先輩、いるかしらね？」

「ええ……」

私は別の恐怖に襲われた。あの、『殺人予告者』というプリントをした人物の恐怖に……。

第三章 裕子先輩の話 10月10日

法子の車が朝比奈邸のガレージに着いたのは、それから5分後のことであつた。この邸に車で来たのは初めてなので、朝比奈家所有の車が並んでいるガレージに来たのも、初めてである。

「すっごーい」

カーマニアでもある法子は、そこにある車を見て、目を輝かせていた。

「あのリムジン、ロールスロイスファントムよ。大きいでしょ？
隣のベンツが小型車に見えるわ」

「そ、そうね」

私は車はほとんど区別がつかないので、法子の言っていることは、チンプンカンプンだ。

「このトランザムファイヤーバード、一体誰が乗っているのかしら？」

法子はスターレットの隣にある黒いスポーツタイプタイプの車を見て言った。その時、

「それは私よ、法子さん」

と私達の後ろで声がした。法子と私は顔を見合わせてから、後ろに目をやった。

「今日は、裕子先輩」

「今日は、お二人さん。ようこそ、朝比奈家へ」

裕子先輩はニッコリ笑って私達に応えた。相変わらず、品のある、きれいな女ひとだ。淡いピンクのツーピースが、とても落ち着いた大人の女性おんなっていう感じだ。憧れちゃうよなア。

「ところで今日は何かしら？」

裕子先輩は、邸の玄関へ向かう道すがら、尋ねて来た。法子はニッコリして、

「それは先輩のお部屋でお話します」

「そう」

裕子先輩も微笑み返した。私はこの二人の美人をとてもうらやましく思いながら、見ていた。

私達はガレージから温室の脇を抜け、庭園の中を通って噴水の横に出た。

「お嬢様」

その時、玄関の方から家政婦の三池さんが小走りで近づいて来た。彼女は私達に会釈した。法子と私も会釈を返した。彼女はそれから先輩を見て、

「旦那様がお呼びです」

「わかったわ。すぐ行きます」

と裕子先輩が応えると、三池さんは再び軽く頭を下げ、そそくさと玄関へ戻って行った。

「取りあえず、私の部屋に行っていてちょうだい。父との話が終わったら、すぐ行くわ」

「わかりました」

私達と先輩は玄関まで一緒に行った。

中はまるでホテルのロビーのように広い。先輩は左手奥の方へ歩いて行き、私達は正面に見える緩やかで広々とした階段に向かい、先輩の部屋を目指した。

「そう言えば、先輩のお父さん、最近まで入院してたのよね」

私がつくと、法子は、

「そうね。もうお身体、大丈夫なのかしらね」

と言った。

私達は先輩の部屋の前で、話をするでもなく、少しボンヤリとして待っていた。

「あら、中に入っていればいいのに……」

しばらくして裕子先輩がやって来て、そう言った。法子が、

「先輩のお部屋に勝手に入るなんて、気が引けましたので」と言うと、裕子先輩は笑って、

「そんな遠慮し合う程度のつき合いなの、私達って？」

と応えながらドアを開き、

「さア、どうぞ、慎み深いお嬢様方」

「ありがとうございます、先輩」

法子と私は、異口同音に言って、部屋の中に入った。

「かけて」

先輩の部屋はフローリングの床に大きな絨毯を敷き詰めた、かなり広い部屋だ。これでこの部屋に入るのは何度目だろうか？ いつ来ても、きれいになっていて、すごい。私のアパートの部屋なんて……。ああ、考えるの、やめとこ。

私と法子は、先輩に勧められて、部屋の中央にある背もたれ付きのゆったりとした皮張りの椅子に腰を下ろした。目の前にあるテーブルは、落ち着いた感じのする円卓で、その上に置かれたテーブルクロスは、純白という言葉がピッタリだった。

「さア、お話をして頂こうかしら、法子さん」

裕子先輩も椅子に腰掛け、ニツコリして口を開いた。法子は真顔で先輩を見て、

「お話する前に、一つ確認しておきたいことがあります」

「何かしら？」

法子はスーツの内ポケットから、例の封筒を取り出して、テーブルの上に置いた。先輩はそれを見て目を見開き、

「それは……」

と言ったきり、しばらく黙り込んでしまった。法子は先輩が話し出すのを待つかのように、何も言わずに先輩を見つめていた。

「これ、貴女のところへ届けられたの？」

「やっ」と裕子先輩は言った。法子は軽く頷いて、

「ええ。しかも封筒を見て頂くとわかるとおり、切手が貼ってあり

ません。つまり、私のアパートの郵便受けに、直接投函されたものなんです」

「……」

裕子先輩は封筒を手に取り、裏返した。彼女の顔がたちまち強ばるのを私は見逃さなかった。

「何、これ？ 一体誰がこんなことを……」

裕子先輩は法子と私を交互に見た。法子は、

「今日の話というのは、実はそのことなんです。その差出人のところに、『殺人予告者』とプリントしたのは、先輩ではないのですね？」

と少々強い調子で尋ねた。裕子先輩は封筒から便箋を取り出して開き、

「違うわ。確かに貴女宛に手紙を出そうとしたのは私よ。中に入っている便箋も、私が貴女達を呼び出そうと思って作った物よ。でも、差出人のところには、何もプリントしてないわよ」

私は少し背筋が寒くなった。

「ということは……」

私が口をはさむと、法子はそれを遮るように、

「この封筒と便箋にプリントしたパソコンはどこにあるんですか？」

と重ねて尋ねた。先輩は法子に封筒と便箋を渡してスツと立ち上がり、部屋の隅にブラツと並んでいる書棚に近づいた。

「ここよ」

彼女は書棚の一つをスライドさせた。するとその奥に、パソコンが置かれた机と、その下に収納された椅子が現れた。法子も立ち上がって先輩に近づいた。私も慌てて立ち上がり、書棚に近づいた。

「ここにパソコンがあるのを知っているのは、私を除いて一人しかいないわ」

先輩は声を震わせて言った。法子と私は黙って先輩の顔を見た。

先輩は少し悲しそうに笑い、

「父よ」

私はその言葉にギクツとした。「殺人予告者」とプリントしたのが先輩でないとすると、先輩のお父さんが……。

「それじゃあ、あれは先輩のお父さんの仕業だっていうことなんですか？」

私が尋ねると、裕子先輩は私を見て、

「わからないわ。わからない……」

とひどく困惑した面持ちで答えた。法子は便箋を封筒に入れて、内ポケットに戻し、

「先輩のお父さんにお話を伺えますか？」

と先輩を見た。裕子先輩は法子に視線を移して、

「ええ。今父は、来客を待っているところよ。少しの間だったら、話ができると思うわ」

「わかりました」

法子はそう言うのと、今度は書棚に目をやって、

「この書棚、全て推理小説なんですか？」

と唐突に尋ねた。先輩はいきなりの無関係っぽい質問に少し戸惑ったようだったが、

「ええ、そうよ。全部で五百冊くらいあるわね」

と答えた。ひえーっ、五百冊もオ！？ 私、いくら推理小説オタクと化しているとは言え、まだ百冊そこそこののにイ。さっすが、推理小説同好会代表！ でも、法子も同じくらい持つてるらしいのよね。みんな実家に置いてあるって話だけども。

「そう言えば、裕子先輩って、どうして推理小説が好きになったんですか？」

私も会話に入れてもらいたいので、そう尋ねてみた。先輩は弱々しく微笑んで私を見ると、

「父の影響よ。父は千冊くらい推理小説を持っているわ。しかも、外国の物は全て原書でね」

「えーっ!?!」

私はすっかり驚いてしまった。千冊という数もすごいが、外国の物は原書だつていうのもすごい。つまり、ドイルやクリスティーなら英語、ルブラン、ルルーならフランス語ということなのだ。

「ということは、先輩のお父さんも、かなりのマニアですね？」

法子が口をはさんだ。裕子先輩はニツコリして、

「そういうことになるわね」

と言った。そして、ドアに向かいながら、

「とにかく、父のところに行きましょう。もうすぐお客様が来られるから」

「はい」

法子と私は、息のピッタリ合ったところを見せて返事をした。

長次郎翁のいるのは一階の居間らしい。玄関のロビーのすぐ左手にある部屋だ。

「先輩、一つお尋ねしたいことがあるんですけど」

法子はドアを閉じた裕子先輩を見て言った。先輩は振り向きながら、

「何かしら？」

「私に出そうとしていた手紙のことなんですけど、一体何をするつもりだったのですか？」

法子は真顔で尋ねていた。彼女の顔から笑みが途絶えた時、それは「かなりマジ」を意味することになる。法子は相当本気で、あの予告状を出した人物の目的が気になっているようだ。

「ちよつとした推理ゲームを思いついたの。それを貴女にためしてみようと思ったのよ」

先輩も真面目な顔で答えた。法子は軽く頷いてから、

「では、先輩があの手紙を出そうとしていたことを知っていた人はいますか？」

「法子さん、貴女、あの手紙を出したのが、本当に殺人を犯そうとしている人物だと思っているの？」

裕子先輩は、ちょっと不服そうだった。しかし法子は構わない。

「はい。否定できる状況ではありません。実際のところ、あの手紙は私のアパートの郵便受けに投函されていたのですし、差出人の『殺人予告者』は先輩がプリントしたのではないとすれば、誰か他の人物がプリントしたことになります」

「そのとおりね。じゃ、さっきの質問に答えるわ。はっきり言つて、私にはあの手紙のことを誰かが知っていたかどうか、わからないのよ」

裕子先輩は言った。私は思わず、

「どういうことですか？」

と尋ねた。先輩は私に目を向けて、

「あの手紙、しばらく見当たらなくなっていたのよ。私、どこかにしまい忘れてしまったのだと思っていたから、さっき法子さんに見せられた時は、本当にびっくりしたのよ」

私は啞然として法子の顔を見た。しかし法子はその答えを予測していたかのように平然としていた。

それから、私達は翁がいる居間のドアの前に来るまで、ずっと黙っていた。

「どうぞ」

裕子先輩のドアノックに伝えて、少し嘎れた声が出た。長次郎翁の声だ。

「失礼します」

先輩がドアを開いて中に入り、法子と私を招き入れてから、ドアを閉じた。

中は、畳二十畳分くらいの広さで、中央には重厚で格調のある木製のテーブルがデンとあり、それを囲むようにゆったりとした二人掛け用のソファが二脚、一人掛け用が二脚、それぞれ向かい合って置かれており、そのうちの一つの一人掛け用に、翁は座っていた。彼は奥のソファに座っていたので、入って来た私達に気づくと、ニッコリして立ち上がった。

「これはこれは。若い女性の、しかもこんな可愛らしい方がお二人もご訪問とは、光栄の至りですな」

翁は実に気さくな感じで、話しかけて来た。法子はニッコリ微笑み返して、

「ありがとうございます、朝比奈さん」

「さア、掛けて下さい」

翁は私達が二人掛けのソファに座るのを見届けてから腰を下ろした。さつすが、礼儀を弁えてらっしゃる。

「裕子、何かお飲物を頼むよ」

「はい、お父様」

裕子先輩は明るく応えると、居間を出て行った。

「さて、私に何かお話でもありますのかな？ 生憎、客がもうすぐ来るので、あまり長くはお相手できませんがな」

翁は先輩が出て行ったのを確認してから、そう尋ねた。法子は、「これを見て頂けますか？」

と内ポケットから封筒を取り出し、わざと裏を上にして、テーブルの上に置いた。もちろん、翁に見易いように。

「ほオ」

翁はあごのひげを撫でながら、封筒に顔を近づけ、じっくりとそれを観察していた。

「殺人予告者、ですか。随分とブツソウな差出人ですな」

長次郎翁は顔を上げて言った。法子は翁をジッと見て、

「この封筒が、昨日の夜から今朝の間だと思われませんが、私のアパートの郵便受けに入れられていました」

「なるほど」

翁は全く動じた様子なく頷いている。法子は封筒を手に取り、中から便箋を取り出してテーブルの上で開いた。翁は便箋の文字を一文字一文字まさに舐めるようにに読んでいたが、

「この手紙の差出人は、朝比奈家で殺人を犯すと宣言しているのですな」

と確かめるように法子を見た。法子は頷いて、

「そういつふうにもとれますね」

と不思議とも思えることを言った。私はキョトンとして法子を見た。翁は眉を顰めて、

「それはどういうことですか？」

「その殺人予告者とプリントした人物と便箋にプリントした人物が同一人物ではないらしいと思えるからです」

法子がキツパリとした口調で答えると、翁の目がほんの一瞬だが鋭くなった。法子もそれに気づいたらしく、

「朝比奈さんは、この殺人予告者とプリントした人物に心当たりがありますか？」

と顔を覗き込むようにして尋ねた。翁は再び柔和な顔つきになり、「さア、わかりませんな。一体誰がそんなことをしたのでしょうか」

と恍けたように答えた。するとそこへ裕子先輩がコーヒーマグを持って入って来た。

「どうぞ」

先輩はまず私達に、そして翁にカップを置いた。

「裕子、お前この手紙のことを知っているか？」

翁は先輩を見上げた。先輩はチラッと法子を見てから、

「ええ。法子さんにさっき見せてもらったわ」

「この差出人について何か知っているか？」

「いいえ」

「そうか」

翁は少し思案顔をして黙ってしまった。先輩が私達の向かいのソファに腰を下ろして、

「お父様、お訊きたいことがあるんだけど……」

と言いかけた時、玄関のチャイムの音が聞こえた。翁はそれに気づくと先輩を見て、

「裕子、きつと高林先生だろう。三池さんは今キッチンで洗い物をしているから、お前が出迎えて差し上げなさい」

「はい」

先輩は仕方なさそうに返事をし、私達を見てから立ち上がって、部屋を出て行った。

「申し訳ありません、お嬢さん方。客が来たようです。裕子の部屋か、こちらのどちらでも結構ですので、どうぞごゆっくり……」

翁も立ち上がって言った。法子も立ち上がったので、私も慌てて立ち上がった。

「では失礼」

翁は軽く会釈した。法子と私はそれに応じた。翁はそのまま居間を出て行った。

「ねエ、法子オ」

私は翁が後ろ手にドアを閉じるのを見届けてから口を開いた。

「何？」

法子はソファに戻りながら言った。私も腰を下ろして、

「朝比奈さん、何か隠してない？」

「そうね。そんな感じね」

法子は少し上の空って感じで応えた。

「何よ、その言い方は……。心ここにあらずね」

私がムツとして言うと、法子はクスツと笑って、

「ごめん、律子。そんなことないよ」

と応えた。そして、

「朝比奈さんは確かに何か隠しているわ。でもそれがあの予告状についてなのか、何か他のことなのかはわからないわね」

とコーヒーカップを手に取って言った。私もカップを手にして、

「他のこと？ 一体何？」

「それはわからない。そんな感じがするってだけのことだから」

その時、居間の前の廊下のあたりで話し声がし、足音が少しずつ奥へ向かって行くのが聞こえた。法子はパツと立ち上がると、居間のドアに近づき、少しだけそれを開いた。

「あれが高林先生かしら？」

彼女はドアの隙間の向こうに見える、翁の後ろ姿と、もう一人の小柄な黒いスーツを着て黒い山高帽をかぶった白髪の老人を見ながら言った。私もドアから顔を出し、

「みたいね」

と呟いた。すると、

「二人共、どうしたの？」

裕子先輩が声をかけて来た。私達はハツとしてドアを開き、先輩を招き入れてから閉じた。

「あの人が高林先生っていう人なんですか？」

私が尋ねると、先輩は頷いて、

「そうよ。父の会社全体の顧問弁護士のリーダーなの。全部で百人くらいいる中のね」

「こ、顧問弁護士が百人!？」

私はすっかり仰天してしまった。一体どれほどの規模なのだろう、朝比奈グループって。

「どんな御用なんですか？」

法子が口を開いた。裕子先輩はギクツとして法子に目をやってから、

「さ、さア……。私にはわからないけど。きっと難しい御用なんでしょうね」

「そうですね」

法子は当てが外れたような目を私に向けてから、肩をすくめた。

「それより、さっきの手紙のことなんだけど……」

先輩は法子の顔を見た。法子も先輩を見て、

「はい。朝比奈さんは何かを知っているみたいですね」

「そうですね。父の態度、変だったわ」

裕子先輩は少々寂し気な表情で応えると、ソファに近づいた。法子も私に目配せして、ソファに近づいた。

「犯人は父かしら？」

先輩はソファに腰を下ろしながら、独り言のように呟いた。法子はその向かいに座り、

「先輩からの情報と、朝比奈さんの態度、それから私の考えを合わせてみると、それが正しい答えだと思います」

と静かに言った。先輩は目を伏せたままで、

「そうですね。そのようね」

と言ったとき、口を噤んでしまった。私は法子の隣に座って、ただ先輩の悲し気な顔を見ていた。

第五章 殺人が起こったのか？

10月10日

私達三人の沈黙を破ったのは、居間の壁に備え付けられているインターフォンだった。

「はい」

先輩はすぐさま立ち上がり、インターフォンに近づいてボタンを押した。

「裕子か。私の部屋に飲み物を頼む。私のはそこにあるコーヒーでいい。高林先生には、紅茶をお持ちするように」

「わかりました」

先輩は私達に目配せをすると、翁のコーヒーカップをトレイに載せ、居間を出て行った。

「何で三池さんに頼まないのかしら？ 三池さん、キッチンにいませんでしょ？ 確かキッチンにもインターフォンあつわよね」

私が言うと、法子は、

「さア。何か理由があるんじゃないの」

と答えた。私は法子の返答に反論したかったが、言葉が見つからないので諦めた。

これは後で法子が指摘するのだが、実は大変な理由があったのである。

「おやつ？」

いきなりドアが開いて、浩一が顔を出した。法子と私は彼に気づき、軽く頭を下げた。しかし浩一はそれには応じずに、

「親父を見かけなかったか？」

と横柄な口の利き方で尋ねた。法子はそれでもニツコリして、

「朝比奈さんなら、ご自分のお部屋です。高林先生とご一緒ですよ。浩一は途端に眉をつり上げて、

「高林と！？ また何の相談だ？」

と言いながら、ドアを閉じた。

「何よ、あの態度!？」

私はドアが閉じ、浩一が去ったのを確認するや否や(まさに a s soon a s よ!)、ムツとして言った。法子はクスツと笑つて、

「怒らない、怒らない。そのくらいのことではいちいち怒ってちゃ、身体に悪いわよ、律子」

と宥めてくれた。私は口を尖らせたまま、

「それはそうなんだけどさア……」

実は私、浩一の正体を知る前は、裕子先輩のお兄様ってことで、内心かなり期待して朝比奈邸に来たことがあるのだ。今にして思えば、ホントにバカな私って感じだわ。

「それよりさ、あの人、妙なこと言わなかった？」

法子は不意にそう言った。私はキョトンとして、

「妙なこと? 何が?」

と尋ね返した。法子は苦笑いして、

「ううん、いいの。私の思い違いかも知れないから」と言い、教えてくれなかった。

しばらくして、先輩が居間に戻って来た。

「さつき、兄がここに来たでしょ?」

先輩は少し嫌そうな顔で尋ねた。法子が頷いて、

「はい。朝比奈さんがどちらにおられるのか聞いて、出て行かれましたよ」

「やっぱりね。父の部屋を出て、廊下の角を曲がったところで、兄とぶつかりかけたのよ」

先輩はソファに腰を下ろして言った。そして小さく溜息を吐くと、「すごい形相だったわ。また父とやり合うつもりみたいだった……」と悲しそうに私達を見た。法子は真剣な顔で、

「何かあったんですか、お兄さんと朝比奈さん?」

「ええ、ちよつとね」

先輩はあまり聞かないでほしいかのように俯き、言葉を濁した。そして、

「あ、やだ、私、砂糖とミルクを持って行くの忘れてたわ……」
と逃げるように部屋を出て行ってしまった。

「何があつたのかしら、あの気分の悪い兄貴と朝比奈さん……」

私が独り言のように口にすると、法子は、

「お金持ちには、私達一般庶民にはわからないような、いろいろな悩みがあるものなのよ」

と答えてくれた。私は、

「フーン」

と何となく納得してしまった。

それからどのくらい時間が経つたのだろうか？ 私はボンヤリと

「殺人予告者」について思いを巡らせていた。法子はさっきからずっと考え込むようにして、目を伏せたままである。

その時だった。

「きゃああアッ！！」

それは裕子先輩の、絶叫とも言える悲鳴だった。

「何、今の！？」

法子はピクンと身体を動かして立ち上がった。私は息を呑んで、

「せ、先輩の声だったわね？」

「そうね」

法子はごく冷静に私に答えると、ドアに向かった。私は法子から離れまいとそれに続いた。

「確か、こっちよね」

私が恐る恐る奥の方を見た時、

「今の声、裕子さんですか？」

松子が声をかけて来た。私達は松子の方に顔を向けた。彼女は口「ピ」の方からやって来たようだった。

「そうみたいです。今見に行こうとしていたところなんです」

と法子が答えると、松子は心配そうな顔で、

「一体何があったのでしょうか？」

法子はニコツとして、

「ゴキブリが出ただけかも知れませんか」

と言って、先に歩き出した。その後松子が続いた。私は松子の後ろから歩いて行こうとしたが、

「あの……」

キッチンから出て来た三池さんに呼び止められた。法子と松子も三池さんに気づき、立ち止まって振り返った。

「何でしょう？」

私が尋ねると、三池さんは少し申し訳なさそうな顔で、

「何があったのですか？」

と尋ね返して来た。私はちよつと考えてから、

「今、裕子先輩の声が聞こえたんです。それも悲鳴でした。聞こえませんでしたか？」

「はい。ちようど圧力鍋で料理を作っていたので、聞こえなかったのかも知れません。その後で、皆さんがドアを開く音と話し声が聞こえましたので……」

三池さんは相変わらず申し訳なさそうに話す。私は思わず法子に目をやった。法子は私と松子を交互に見て、

「とにかく、朝比奈さんの部屋へ行ってみましょう」

「ええ、そうね」

法子と私と松子は、ポカンとしている三池さんを尻目に、翁の部屋に向かった。

「そう言えば、浩一さんはどうしたのかしら？」

と私が思い出したように言うと、松子が、

「浩一さんはご自分の部屋に戻られていると思います。さっきベランダにおられるのを見かけましたから」

法子は歩を進めながら、

「その他の方はどちらに？」

「はい、庭師の山本さんは庭園にいますし、礼子さんは居間の脇のサニールームにいらつしやると思えます。それが何か？」

松子は不思議そうに法子に尋ねた。法子は松子を見てニコツとし、「いえ、別に。それと、高林先生はまだ朝比奈さんのお部屋でしょうか？」

「高林先生ですか？ さア……。出て行かれたのは見ておりませんので、そうではないでしょうか」

松子は考え込むようにして小首を傾げた。私はその何とも言えない自然な動きと色気に、女盛りの魅力を感じた。(私は同窓会などで、男共に「色気がない」と言われてばかりいるので、羨ましい限りだ。)

確かに彼女は、裕子先輩があと何年かすればこんな感じだろうというくらい、先輩に似ていた。つまり、江威子さんに似ているのだ。翁が気に入るのも無理ないよなア。

私達はまもなく翁の部屋の前に来た。彼の部屋は離れのようになっており、私達は途中、渡り廊下のようになっているところを通った。

「こちらです」

松子が先に立って歩き、ドアの前に向かった。彼女はドアを軽くノックした。

「貴方？ いらつしやいますか？」

しかし、ドアの向こうからは翁の返事はおるか、裕子先輩の声も聞こえて来ない。松子は不安そうに法子を見た。私も法子に目をやった。

「入ってみましょう」

法子は松子を促した。松子はゆっくり頷いて、ドアを開いた。先に法子が入り、次に松子、そして私が入った。

「先輩！」

私は部屋の中のソファに凭れるようにして倒れている裕子先輩を

見つけて叫んだ。床には砂糖とミルクが飛び散っており、それぞれの入れ物も砕け散っていた。

「ああっ!!!!」

松子の声があった。法子はその声に反応し、右手奥を見た。私も恐る恐る、そちらに目をやった。

「きゃっ!!!!」

思わずそう叫んでしまった。私の視界に、机に向かって座っている格好で、背中に短剣を突き立てられている翁の姿が飛び込んで来たからだ。

「朝比奈さん!!」

法子はすぐに翁に近づいた。松子はオロオロして、動くことも声を出すこともできない。私は翁と裕子先輩を交互に見ながら、法子に声をかけるので精一杯だった。

「ど、どうしよう?」

法子は翁がすでにこの世の人でないことを確認したらしく、悲しそうな目で私を見ると、

「律子、すぐに警察に連絡して。朝比奈さん、亡くなっているわ」

「え、ええ……」

私は応えるには応えたが、身体が動かない。今になって、一人が死んだことを実感して、恐怖が込み上げて来たようだ。すると、それに気づいた法子が、

「警察へは私が連絡するわ。貴女は先輩を看てあげて」

と裕子先輩を見ながら言ってくれた。私はコクンと頷くと、足下に倒れている裕子先輩の脇に膝をついて、

「先輩、しっかりして下さい」

と声をかけ、肩を揺すった。法子はそれを見届けてから、松子を見た。

「奥さん、電話はどこにありますか?」

「ベッドの脇のワゴンの上にあります」

松子は消え入りそうな声で答えた。法子は頷くと周囲を見回し、

部屋の反対側の端にあるベッドに向かい、その脇のワゴンに載っている電話の受話器をハンカチで包むようにして取り、もう一枚ハンカチを出して、指紋が着くのを防ぐためなのか、それで右手の人差し指を覆い、ボタンを押した。

その間、私は先輩を呼び続けた。十回ほど呼んだところで、裕子先輩はようやく目を開けた。

「あっ、律子さん……」

先輩は少しボンヤリした目で私を見て、ゆっくりと起き上がった。私は彼女に肩を貸し、ソファに腰掛けさせた。

「父が……」

と先輩が口にしたので、私は自分を落ち着かせる理由もあってゆっくり頷き、

「わかってます。今、法子が警察に連絡してくれていますよ」

と答えた。裕子先輩はホツとしたような顔になり、

「そ、そう……」

と言うと、涙をポロポロ流し始めた。今、彼女は父親を失った悲しみをやっと感じ始めたのだ。

「裕子さん……」

松子も涙声で先輩の隣に座った。二人は抱き合って啜り泣いた。

私もそんな二人を見ているうちにもらい泣きしてしまった。

「律子」

法子が静かだが強い調子で私を呼んだ。私はハンカチで涙を拭いながら、

「何？」

と法子に近づいた。彼女は真剣な目で、

「警察の人が来る前に、いくつか調べておきたいことあるの。協力して」

「え、ええ……」

私は少しも動揺していない法子に戸惑いを覚えながらそう応えた。

「高林先生はどこに行ったのかしら？」

彼女は言った。私もそう言われて改めて部屋の中を見回した。

「そ、そう言えば、姿が見えないわね」

法子はソファの前にあるテーブルに近づき、その上に置かれたガラスの頑丈そうな灰皿とコーヒーカップ、ティーカップに目をやった。

「コーヒーは残っているけど、紅茶は全く飲んだ様子がない」

法子は次に灰皿の中の吸い殻を見た。

「銘柄は二種類ね。キャビンマイルドとハイライト。灰がやけに細かくなっているわね」

「キャビンは父のものだわ」

裕子先輩が顔を上げて言った。法子は先輩を見て、

「となると、ハイライトは高林先生のものでしょうか？」

「それはちよつとわからないわ」

裕子先輩は目を伏せるようにして答えた。法子は軽く頷いて、次に散らばった砂糖とミルクを避け、再び翁に近づいた。

「この短剣、柄が潰れている。どうしてかしら？」

「えっ？」

私も興味をそそられて、少し怖かったが、翁の死体に近づいた。

確かに背中に突き立てられた短剣の柄は、何かで叩かれたのだろうか、潰れていた。何だろう？

「そ、その短剣は……」

裕子先輩はフラフラしながら立ち上がり、翁に近づいた。法子が先輩をサツと支えた。

「私が父のフランスのお土産でもらったものよ。でも、刃がついていない偽物なのよ」

先輩のこの発言には、私はもちろんのこと、ふだんあまり動じたことがない法子もびっくりしたようだった。

「裕子さん……」

松子も驚いて立ち上がっていた。法子はしばらく短剣を見つめていたが、やがて、

「とにかく、ここを出しましょう。一応、いくつかのことは確認できました」

私達は法子に追い立てられるように翁の部屋を出た。もう物言わぬ翁だけを残して……。

「警察はもうすぐ来ると思いますので、ご家族の方全員に居間に集まってもらって下さい」

法子は松子に言った。松子は、

「は、はい」

と弱々しく応えた。法子は私の腕を引き、松子と裕子先輩から離れた。

「な、何よ？」

私が小声で尋ねると、法子も小声で、

「高林先生、どうしたと思う？」

「そ、そうねえ……」

二人いた部屋で一人が死んでいて、もう一人が姿を消していれば、一般的に考えて、姿を消した者が犯人ということになる。しかしそれでは……。

「思い当たったことがあるみたいね？」

法子が言ったので、私は少しビクツとしながらも、

「ええ。もし高林先生が犯人だとしたら、あの『殺人予告者』

の手紙を出した人物ではあり得ないことなるわ」

「そうね。高林先生と私は一面識もないし、ましてや高林先生が私のアパートを知るはずもない。それに高林先生には、裕子先輩のあの手紙を持ち出すチャンスがあつたとは思えないわね」

「そう、そうよ」

私は大きく頷いてみせた。法子もそれに応じて頷き、

「となると、あの手紙を出した人物と高林先生は別人の可能性が高いことになる。すると、朝比奈さんが殺されたことは、あの手紙とは無関係、という可能性も出て来るわね」

「でも、それにしてもタイミングが良過ぎない？」

私は反論してみた。法子は、

「そうよ。タイミングがあまりにもいいのよね。やっぱり無関係じゃないと思うわ」

「そ、そうよね」

私はもう一つの疑問に行き当たった。あの短剣だ。

「それにあの短剣は……」

私が口になると、法子はそれを遮るように、

「それも高林先生が犯人であるとする、解決し難い疑問になるわね」

と言った。私は頭がこんがらがりそうだった。

松子を始めとして、翁以外の総ての朝比奈家の人々が居間に集まったのは、それから10分ほど経ってからだった。

「一体誰に殺されたんだ？」

さして悲しんでいる様子もない浩一が誰にともなく言い、一人掛けのソファに腰を下ろして脚を組んだ。

「それはまだわかりません」

法子が窓の外を見ていた目を浩一に向けて答えた。浩一はフンと鼻で笑い、

「どうせバカな奴が、親父の遺産を欲しくて欲しくて、焦って殺したんだろうぜ。愚かなことだ」

と吐き捨てるように言った。するとこれまた少しも悲しんでいる様子もない礼子が、浩一の向かいのソファに座り、

「ああら、そうすると、この中に犯人がいるとおっしゃるの、お兄様？」

と浩一をバカにしたような口振りで尋ねた。浩一もその口調に気づいたのか、ムツとして礼子を睨みつけ、

「じゃあ他に誰がいるんだよ！？ 外からいきなり殺人鬼がやって来て、親父を殺して逃げたとも言うのか！？」

と反論した。すると礼子はケタケタと笑い出して、

「そんなこと言ってないわよ。私には何もわからないわ」と言った。

「お兄様もお姉様も、不謹慎です。お父様が亡くなったというのに……」

法子や私と一緒に窓のそばに立っていた裕子先輩が、たまりかねたように言った。すると浩一がギロツと先輩に鋭い目を向けて、

「何が不謹慎なんだよ、シンデレラ気取りの裕子お嬢様？」

と皮肉めいた言い方で尋ねて来た。裕子先輩は、ちよっとキツとな

つたようだったが、反論せずに黙っていた。今度は礼子が、
「そういうところが、シンデレラ気取りなのよ、裕子」

と口をはさんだ。しかし、先輩は何も言わずにいた。礼子はそれを不機嫌そうに見ていたが、やがてパイと顔をそむけると、テーブルの上に出されたコーヒーカーップを手に取った。

「お嬢様……」

山本のおじいさんが、手拭いを手にしたまま、先輩に近づいた。

先輩は山本のおじいさんに目をやり、小さく頷いた。

三池さんも目を潤ませて先輩を見ている。

先輩達のやり取りをただ悲しそうに見守っている松子は、哀れな未亡人としか言いようがなかった。

「先輩……」

法子が小声で呼びかけると、裕子先輩はハツとして法子を見た。

法子は先輩に近づき、さらに小声で、

「ちょっと確認したいことがあるんですけど」

「何かしら？」

先輩の声は少し震えていた。法子は先輩の耳元に口を寄せて、

「高林先生は、先輩がコーヒーと紅茶を持って行った時には、まだいたのですか？」

と尋ねた。私も法子と先輩に近づき、耳を傾けた。先輩はキョトンとしたような顔で法子を見つめていたが、

「え、ええ。まだいらしたわよ。それが何か？」

「もめている様子はありませんでしたか？」

「そんなことはなかったわ」

先輩は言ってから少々間をおいて、

「貴女、高林先生を疑っているの？」

と尋ね返した。法子は軽く頷いて、

「今わかつている状況から判断すると、それが一番自然です」

「そうね」

先輩は悲しそうに同意した。すると法子は、

「でも高林先生が犯人だとすると、いくつかの矛盾が出て来るんです」

「矛盾？」

先輩は不思議そうな目で法子を見た。法子も先輩を見つめて、

「あの短剣と例の手紙です」

「……！」

先輩は蒼ざめていた。私もやはり蒼ざめていただろう。きっと先輩は私と同じことに思い至ったのだらうから。

「矛盾を解決する方法が一つだけあります」

法子は続けた。私はドキドキして法子を見た。先輩も同様のようだ。

「高林先生は共犯で、他に犯人がいて、その人が短剣を使って……」

と法子は言いかけて口を噤んだ。サイレンの音が聞こえて来たのだ。法子は再び窓に近づいて外に目をやり、

「警察が到着したようね。思ったより早かったわ」と言った。

「裕子、お前、白状した方が罪が軽くなるぞ」

浩一が立ち上がりながら言い放った。礼子もそれに続いて立ち上がり、

「そうね。その方が、情状酌量の余地があるってものよね」

とイケシャアシャアと言つてのけた。何よ、こいつら！先輩はついにたまりかねて、

「いい加減にして！」

と叫んだ。浩一はフンと鼻を鳴らして、

「冗談だよ」

「そうよ。貴女みたいな意気地なしの小娘に、人を殺せる訳がないじゃないの」

礼子の言葉はあまりにひどかった。しかし、先輩はそんな挑発に乗るどころか、反撃に転じた。

「犯人は饒舌になるとも言いますよね、礼子お姉様」

礼子は先輩の反撃に一瞬ビクツとしたが、すぐさま凄まじい形相になり、

「姉に対して口答えするんじゃないよ、裕子！」

と怒鳴った。気性が激しい女なのだ。そんな二人のやり取りを、浩

一はニヤニヤして眺めていた。

第七章 捜査の始まり

10月10日

ほどなく警察の人達が邸に入ってきた。居間に現れたのは三人の私服刑事で、その他数十人は庭や他の部屋、そして犯行現場へと散って行ったようだ。

「この事件の捜査主任の森尾です。このたびのこと、お悔やみ申し上げます」

三人のうちの年輩の男の人が松子に近づいて言った。40代半ばくらいの、まさにベテランといった雰囲気のおジ様だ。

「は、はい」

松子は消え入りそうな声で応えた。すると浩一が森尾主任に近づいて、

「父が亡くなった今、この私がこの家の当主です。挨拶は私にしてもらいましょうか、森尾さん」

と皮肉たつぷりの口調で、命令するように言った。森尾主任は浩一を見て、

「そうですか、それは失礼しました」

と言い、軽く頭を下げた。そして、

「取り合えず、家族の方一人一人から、事情聴取をさせて頂きます」

森尾主任のその言葉に、浩一も礼子もギクツとしたように顔を見合わせた。森尾主任は、

「ではまず、主である貴方あかしから伺いましょうか。えーと、お名前は？」

と浩一を睨んで尋ねた。浩一は一瞬たじろいだようだったが、すぐに気を取り直して、

「朝比奈浩一です。どんなことでしょうか？」

と尋ね返した。森尾主任は他の二人の若い刑事に目配せした。若い刑事は、私達に部屋から出るように指示した。松子以下7名が、居間から出された。

「残念ね。話聞けないわね」

法子に囁くと、法子は、

「そうでもないわよ。何とかなるわ」

と応えた。私はキョトンとしてしまった。

「こちらで待ちましよう」

松子が隣の応接間のドアを開いた。礼子が何も言わずに最初に中に入った。続いて裕子先輩が、そして法子、私、松子という順番で入った。

応接間の中は、居間と違ってそれほど広くなかった。壁には大きな油絵の風景画が掛けられており、部屋の中央には、来客用の大きな皮張りのソファが二対置かれていた。ソファを隔てているテーブルは漆黒で、その上にこれまた大きなガラスの灰皿がデンとある。居間に比べるとかなり事務的な印象がする部屋である。

「もう夕方か」

法子が窓の外の少し赤くなった太陽を見て呟いた。彼女はそう言いながらも、外で活動している鑑識の人達に目をやっているようだ。

「この事件、最初から矛盾が多いのよね」

彼女は私に話しかけているのか、独り言なのかわからない程度の声で言った。

「矛盾が多い？」

私はいくつかの点に気づいていたが、法子に喋らせるためにわざととぼけて尋ねた。法子は窓の外を見たまま、

「まずあの予告状を作ったのは先輩だけど、出したのは違う人だということ」

「ええ」

私は相槌を打った。法子は私をチラツと見てから、

「そしてもう一つは、予告状に細工した人物と殺人の最有力容疑者も別人らしいということ」

「そうね」

法子は私の方に向き直り、

「さらにもう一つあるわ」

「えっ？」

私が思い当たったのは今のところその二点だったので、法子のその発言に少し驚いた。彼女は再び窓の外に目をやり、

「予告状を出した人と、犯人も同一人物ではないらしいということね」

「えっ？　そ、それはそうでしょ。予告状の細工をしたのは、殺された朝比奈長次郎さんなんだから」

私がかっかりして反論すると、法子は微笑んで、

「違うわよ。朝比奈さんは予告状に細工をした人でしょうけど、出した人かどうかはわからないわ」

と答えた。私はしばらくポカンとしてしまった。

その時、浩一が応接間のドアを開いて入って来た。すると礼子が彼に近づき、

「あら、随分早く釈放されたのね？」

と皮肉めいた言葉を吐いた。浩一はしかし、その礼子の挑発的な言葉を見無視して、

「次はあんただよ、松子さん」

と無表情な顔で松子を見た。松子は一瞬ギクリとしたように浩一を見てから、

「は、はい」

と小さな声で応えると、そそくさと応接間を出て行った。浩一はそれを見届けてからソファに腰を下ろしてテーブルに両足を載せてふんぞり返った。そして、

「下らんことばかり聞きやがって、あの能なし刑事共が……」
と吐き捨てるように言った。礼子が向かいのソファに座って脚を組み、

「一体何を聞かれたの？」

と面白そうに尋ねた。浩一はギロリと礼子を睨むと、

「親父の遺産のことさ。遺言状はあるのかとか、総額でどのくらい

になるのかとか。高林のことを話したら、それに興味を持ったみたいで、しつこく聞いて来やがった」

「高林先生のことね。そう言えば、高林先生、どこに行っちゃったのかしら？」

礼子が尋ねると、浩一はフンと鼻を鳴らして、

「さアな。警察でも調べるらしいが、親父の背中に突き立てられていた短剣の持ち主のことも調べるみたいだぜ」

と裕子先輩に目を向けた。先輩の顔はたちまち蒼ざめ、やがて白くなってしまうた。礼子はその反応に気づき、

「おやまア、裕子なの、その短剣の所有者は？」

とわざとらしい口調で先輩に訊いた。先輩は顔を俯かせて黙っていた。礼子はそれを見て勝ち誇ったような顔になり、

「随分あっさり認めちゃうのね。貴女がお父様を殺したんでしょ？」

「違います！ 私が行った時はもう、お父様は……」

先輩は反論したが、そこまで言うとう翁のことを思い出したのか、声をたてずに泣き出してしまった。

「そうやって都合が悪くなるとすぐ泣くのが貴女の一番悪いところよ、裕子」

礼子は全く容赦しなかった。すると法子が、

「裕子先輩は犯人ではありませんよ、礼子さん」

と口をはさんだ。礼子、そして浩一が、ほぼ同時にこの「部外者」である法子を睨みつけた。

「どうしてよ？」

礼子は法子に近づきながら強い調子で言った。浩一は動かずに法子を睨んでいる。私は礼子法子にかみつくんじやないかと思っすっかりうるたえていたが、法子は全くうるたえた様子もなく礼子を見て微笑み、

「先輩が朝比奈さんのお部屋を出た時、浩一さんと会っているからです」

と答えた。浩一が今度は蒼ざめる番になった。礼子はそれに気づく

とニヤリと笑い、

「あらあら、形勢逆転ね。どうするのかしら、お兄様？」

と浩一に目を向けた。浩一は蒼ざめたままで唇を震わせ、

「お、俺が部屋に入った時は、まだ親父は生きてたんだ！ 入って行った俺を見て親父はものすごい剣幕で出て行けって怒鳴ってたんだぞ。高林の奴は、その間ずっと背中を向けたままで、俺の顔を見ようともしなかったんだ。本当にシヤクに触るジジイだ！！」

と怒鳴り散らした。今度は法子が、

「それからどうなったんですか？」

と尋ねると、浩一はキツと法子を睨んで、

「不愉快だからすぐにドアを閉めて出て来たよ！ だから俺は犯人じゃない！」

と叫び声をあげるように言った。しかし礼子は、

「となると、最後にお父様を見たのは、お兄様ね」

「ち、ちが……。違うぞ！ 高林だ！！ 奴が親父を殺したんだ！ 奴が最後まで親父と一緒にだったんだからな！」

浩一はニヒルな二枚目をかなぐり捨てて、半ば錯乱したように喋り続けた。コイツ、相当アブナイ奴かも。

「でもねエ。高林先生がお父様と一緒にだったかどうかは、わからないものねエ……」

礼子は実に嬉しそうに言った。浩一はカッとなって、

「高林は確かにいたんだ！ 裕子だって見ただろう！？」

と意外な人に救いを求めた。先輩もハツとして顔を上げた。やつと何とか冷静さを取り戻したのか、

「え、ええ。確かに高林先生はおられました。私がお兄様とすれ違ったのは、部屋を出てすぐの廊下の角ですから、その間に先生がどこかに行かれたとは思えません」

といったもの先輩に戻り、分析してくれた。浩一はホツとした表情になり、

「そ、そおれ見る。俺は犯人じゃないぜ。高林だよ、絶対にな」

「それは変です」

法子が唐突に言った。部屋にいた全員が目が、いつせいに法子に向けられた。

「何が変なんだよ!？」

自分の考えにイチャモンをつけられた浩一は、すっかりムキになつて言った。法子はチラツと先輩を見てから、

「高林先生には、あの短剣を使うことはできません。どこにあるのかご存じではないでしょうか」

と、とんでもないことを言い出した。私はギョツとして先輩を見た。先輩はすっかりびっくりした様子で法子を見ていた。

「じゃあやつぱり裕子なんじゃない、犯人は」

礼子がヘラヘラ笑いながら言うと、法子は礼子を見て、

「さきほど申し上げましたとおり、先輩には朝比奈さんを殺すことはできません。先輩の後に浩一さんが朝比奈さんに会っているからです」

「でも、お兄様が部屋を出た後、もう一度戻ればいいじゃないの？

短剣は裕子の部屋の壁に掛けられていたものでしょ？ いつでも持って行けるもの」

礼子はどうしても裕子先輩を犯人に仕立て上げたいらしい。ちょっとしつこい。

「部屋には高林先生がいたのですよ」

法子が言うと、礼子はいいに降参したのか、プイと顔を背けてソファに戻った。

法子の言葉を整理してみると、この事件にはたくさんの袋小路があった。

裕子先輩が仮に（ホントに仮に）犯人だとすると、浩一と高林先生の存在によりその可能性は否定される。

浩一が犯人だとすると、高林先生の存在によりその可能性は否定される。

そして、高林先生が犯人だとすると、凶器の短剣の存在によりそ

の可能性は否定される。

「どういうことだろう？ 犯人は誰なのだろうか？ 一体どうやって朝比奈さんを殺したのだろうか？ 何かとんでもないトリックがあるのだろうか？ 私には全くわからなかった。」

応接間に、ちよつと異様な沈黙の時が流れた。

その沈黙が破られた。二人の若い刑事の一人が、ドアを開いて顔を出したのだ。彼は中を見回して法子を見つけると、手招きをした。私も法子の後から刑事に近づいた。

「中津法子さんですね？ 主任が呼んでおります。居間の方へどうぞ」

と刑事が言ったので、私は驚いて法子を見た。しかし法子は驚いたふうもなく、

「わかりました」

と応え、刑事について応接間を出た。私も慌ててそれに続いた。

第八章 森尾主任との話 10月10日

若い刑事はドアを閉じ、法子の方に向き直ると、ニッコリして、「いやア、噂に違わない美人で、感激しています」

「はい？」

さすがの法子も少しポカンとした感じで言った。刑事は軽く敬礼をして、

「失礼しました。私、警視庁八王子署刑事第一課所属の、藤江功巡查であります」

「それはどうも」

法子は呆気にとられながら応えた。私はそれ以上に呆れていた。

藤江刑事は、

「自分と同期の者が、成城署に勤務しております……。例の温水プール事件のことを聞いているんです」

と続けた。私はそこでやっと合点がいった。なるほど、そういうことか。

「さっ、早く」

藤江刑事は私達を先導して、居間のドアに近づいた。するとその時ドアが開いて、中から顔が悪くなった松子が現れた。彼女は私達に小さく会釈すると、応接間に入って行ってしまった。

「暗い人だなア」

藤江刑事は松子が中に入るのを見届けてから呟き、

「さア、どうぞ」

と居間のドアを開いた。法子はニッコリして、

「ありがとうございます」

と応え、中に入って行った。私もちよつと藤江刑事に会釈して中に入った。えっ？ 何でかって？ だって、彼つてば、ずーっと法子のこと見つめてるんだもの。私は全く眼中になしって感じだったからよー！

「どうもすみませんね」

中に入って行くと、ソファに座っていた森尾主任が立ち上がり、私達に近づいて来た。

「貴女のごことは、藤江から聞いております。なかなかの名探偵だそうですね」

「そんなことはありません。運がいいだけなんです」

法子は照れているようだ。彼女は他人ひとから誉められるのが苦手だ。何か、気の毒なくらい、ソワソワしてしまう。まっ、そこがまた法子の可愛いところで、男の子にはまさに「たまらない」魅力らしいけどね。

「まア、お掛けください。いくつかお尋ねしたいことがあるんです」「はい」

法子と私は、二人掛けのソファに座った。向かいには森尾主任と藤江刑事が、そして左の一人掛けのソファにはもう一人の若い刑事（後で聞いたんだけど、田村利明っていうらしい）が座った。田村刑事の方は藤江刑事と違って、私達のことをあまり快く思っていないようだ。

「貴女方は、どうしてこの屋敷にいらしたんですか？」

主任さんが尋ねた。法子はすぐさま、

「私達の大学の先輩である裕子さんに会うためです」

「裕子さん？ ああ、ガイシャの次女で、死体の第一発見者の方ですね。何のために？」

森尾さんの声は穏やかであるが、キビキビとされていて、有無を言わせない調子だった。

「こんなものが私のアパートの郵便受けに投函されていたからです」法子は例の封筒を取り出して、テーブルの上に置いた。森尾さんは藤江刑事や田村刑事と顔を見合わせてから、その封筒を手に取った。

「貴女宛の手紙のようですね。切手が貼ってない。差出人は……」森尾さんは封筒を裏返して顔色を変えた。隣でそれを覗き込んで

いた藤江刑事も息を呑んだ。

「さ、殺人予告者!？」

と森尾さんは声に出し、中に入っている便箋を取り出して、内容に目を通した。そして法子を見て、

「これは一体……?」

誰が出したのですか、と尋ねようとしたのだろうが、それがいかにも愚問であるか気づいたのだろう。森尾さんは言葉を呑み込むようにして一息吐き、封筒をテーブルの上に戻し、

「何故こんなものが貴女のところ?」

「それはわかりません。ただし、その封筒の宛名と中に入っている便箋にプリントした人はわかっています」

法子の発言は、森尾さん達にはかなり衝撃的だった。主任さんは、「だ、誰なんですか!？」

とひどく慌てた様子で尋ねた。法子はテーブルの上の封筒に目をやり、

「裕子先輩です」

「……!!」

森尾さんはもちろん、藤江刑事も田村刑事も、相当驚いているようだ。法子は、

「でも、その『殺人予告者』とプリントしたのは、先輩ではありません」

「えっ?」

そう言われて、主任さんと藤江刑事、そして田村刑事までもが、封筒を見た。

「その『殺人予告者』は、少しプリントが擦れています。私は、そのプリントは封をしてからされたものだと思っています」

「しかし、裕子さんが封をしてから、差出人のところをプリントしたのかも知れませんよ」

藤江刑事が口をはさんだ。法子はニコツとして彼を見ると、

「もし先輩が差出人のところもプリントしたのであれば、封筒を閉

じてしまつてからプリントするということはしなかつた、と思ひます」

と答えた。藤江刑事は法子に微笑まれたのと軽いなされたので、耳まで赤くなつてしまつた。

「は、はア」

「私が、『殺人予告者』とプリントしたのが裕子先輩ではないと思ふのは、その点ともう一つあります」

法子は主任さんに目を向けた。主任さんは、

「もう一つ？」

とおつむ返しに尋ねた。法子はコクリと頷いて、

「それは、『殺人予告者』とプリントしたこと自体です」

「はア？」

主任さんはポカンと口を開いて法子を見た。藤江・田村の両刑事も同じ。私もそうだったかも知れない。

「どうのことですか？」

主任さんがようやく尋ねた。法子は、

「便箋の内容はお読み下さいましたよね？」

「はい」

「便箋には、殺人事件などとは一言も書いていません。事件が起こると書いてあるだけです」

「はア、なるほど」

主任さん、大きく頷いた。藤江刑事も頷いている。しかし、田村刑事はムスツツとしたままだ。

「つまり、ここに二つの意志が見えて来るのです。事件が起こると言っている意志と、これから人を殺すぞと言っている意志と」

と法子は犯罪学の講義よろしく、話を続けた。

「ふーむ」

主任さんは腕組みをして考えていたが、

「わかりました。何にしても、直接本人から話を聞くのが一番ですようね」

と言った。そして田村刑事を見て、

「裕子さんと呼んでくれ」

「はっ」

田村刑事は私達をチラッと見てから、居間を出て行った。主任さんはそれを見届けてから、

「ところで、この便箋と封筒、私がお預かりしていいですか？」

「はい、どうぞ。でも、私と律子の指紋がベタベタついてますから、あまり証拠としての価値はありませんよ。それに裕子先輩と朝比奈さんの指紋も……」

と法子が答えると、森尾さんはニヤリとして、

「指紋は出ないと思ってますから。それにそのことばかりじゃなく、この家の連中にも見せてみたいんです。反応を調べるためにね」と言った。法子もニコツとして、

「そうですね」

私達はそこで居間を出て、応接間に向かった。廊下で田村刑事に付き添われた先輩とすれ違ったが、お互いに声をかけられなかった。いや、かけ辛かったと言った方が正しいだろう。

外はすっかり夜。私達はやっと解放されて、キッチンで夕食をとった。浩一と礼子は相変わらず先輩をいじめており、松子はオロオロして止めることもできない。法子と私は口出しできる立場にないため、堪える裕子先輩を黙って見守るしかなかった。

「お二人は帰って下さって結構ですよ」

私達がキッチンを出て行くと、藤江刑事が声をかけて来た。

「かまわないんですか？」

法子が尋ねると、彼は頷いて、

「ええ。内部の者の犯行と見るのが正しいですからね。でも、あまり遠くへ行ったりしない下さい」

と答えた。すると、法子はいたはずらっぽく笑って、

「あの予告状、私が作ったのかも知れないですよ？」

「ええっ!？」

藤江刑事はギクツとして法子を見た。私もギクツとした。しかし、

法子はクスクス笑い出し、

「そんなことありません。ごめんなさい」

と言ってから私を見て、

「さア、律子、帰りましょ」

「え、ええ」

私は少し呆気にとられながら応えた。

私達が庭に出ると、まだ鑑識課の人達が庭を探っていた。サーチライトのようなものが、あちこちを照らしている。

「どこかしら？」

法子は不意に言って、キョロキョロとあたりを見渡し始めた。誰かを探しているのだろうか？

「あっ!」

法子は温室の入り口で、山本のおじいさんと話している、白髪混じりの総髪（おんがみ）の背の高いスーツ姿の男の人を見つけて叫んだ。あれ？
確かあの人は……。

「喜多島のおじ様！」

法子は声をかけ、小走りでその男性に近づいた。あっ！ という
ことは……。

「よオ、法ちゃん。やっぱり法ちゃんだったのか」

喜多島のおじ様はニツコリして応えた。

彼は警視庁にその人ありと言われていた名検死官の、喜多島啓造である。今まで検死した死体の数は数百体、関わった事件は数千件と、警視庁の中でもベテランの人だ。役職は警視で、たぶん森尾さんより偉いはずだ。

「成城の事件以来だね。元気そうぞ何よりだ」

「おじ様もね」

法子はとびつきりの笑顔を見せた。そして、

「おじ様、忙しいですか？」

と尋ねた。喜多島さんは苦笑いをして、

「いや、そうでもないよ。手持ち無沙汰なもんで、山本さんと話していたところだ」

と山本さんの方を見た。山本さんは、

「それじゃ、私はこれで……」

と言つと、邸の方へ歩いて行った。喜多島さんはそれを見送つてから、

「何か用かね？」

と法子に目を向けた。法子は真顔になって、

「いくつか教えてほしいことがあるんです」

「なるほど」

私達は温室の前にあるベンチに腰を下ろした。喜多島さんは立ち
たままだ。

「どんなことかな？」

「朝比奈さんの死亡推定時刻なんですけど、おじ様はどう考えてらっしゃるの？」

法子の問いに喜多島さんは少々面喰らったようだったが、

「死亡推定時刻かア……。そいつは少し難しいな」

「えっ？ どういうことですか？」

喜多島さんの意外な返答に、法子は身を乗り出した。喜多島さんは苦笑いをして、

「ホトケは背中に突き立てられた短剣で心臓を刺され、内出血によるショック死をしたと思われる」

「はい」

私も思わず身を乗り出した。喜多島さんは上着のポケットから煙草を取り出して、

「死因はこれほどはつきりしているんだが、死んだ時刻がちと難しい」

「どうしてですか？」

法子は間髪入れずに尋ねた。喜多島さんはライターで煙草に火をつけてから、

「犯人の奴、少し悪知恵を働かせたのかな。朝比奈さんの身体に細工をしている」

と答えた。私はキョトンとしてしまったが、法子は、

「睡眠薬、ですか？」

「えっ？ どうして知ってるんだい？」

喜多島さんはびっくりして法子を見た。法子はちよつと肩を竦めて、

「知っていたわけじゃありません。ただ、朝比奈さんの死体の不自然さからそうじゃないかなって思ったんです」

「なるほど。さすがは法ちゃんだな。朝比奈さんの死体は、背中に短剣を突き立てられて死んでいるんだが、まるで抵抗した跡が発見されなかった。つまり、起きている状態で殺されたのではない、と推論できるわけだ」

喜多島さんは煙を吐いて言った。法子は、

「それで犯行時刻は何時頃なんですか？」

「私の見立てでは、検死前3時間から4時間とどこかな。だから2時半から3時半くらいというところだ」

「ということは、私達が翁と別れてから先輩の悲鳴を聞いて駆けつけるまでの間と一致することになる。」

「そうですか」

法子はしばらく考え込んでいたが、

「それからもう一つ。高林先生はどうされたかわかりましたか？」

「ホトケと一番最後まで一緒にいた人物だね。まだ行方はわかっていないよ。事務所にも戻っていないらしい。」

私はちよつと疑問に思ったことがあったので、口をはさんだ。

「あのオ、睡眠薬のことなんですけど、何でそれが細工になるんですか？」

喜多島さんはチラツと法子を見た。法子は頷いてから私を見て、

「睡眠薬を多量に服用すると、新陳代謝やその他の身体の活動が鈍くなるのよ。そんな状態で殺されると、通常の状態で殺されたのと同じような違いが出て来るの」

「つまり、推理小説によくある、死亡時刻のトリックね？」

「そういうこと」

法子はニツコリして応えた。すると喜多島さんが、

「まア、解剖に回せば、睡眠薬の濃度もわかるだろうし、死亡時刻ももう少し絞れるだろうがね」

と言った。法子はそれに頷きながら、

「それから、凶器の短剣なんですけど、柄がつぶれていましたよね？」

「ああ、そうだね」

「あれを叩いたもの、見つかりましたか？」

法子の問いに喜多島さんは渋い顔をした。

「まだだ。実は見つからない以上に疑問な点がある」

「どんなことですか？」

法子は立ち上がって尋ねた。喜多島さんは、ベンチの脇にある吸い殻入れに煙草を投げ込み、

「何故犯人はそんなものを使ったのか、ということだよ」

と言った。私は喜多島さんの言いたいことが何となくわかった。一方法子は完璧に理解したようだ。

「つまり、背中を刺して殺すつもりだったら、本物のナイフや包丁の方が確実に手っ取り早いということでしょ？」

「そうだ。なのに犯人は、刃のついていない偽物の短剣を、まるで吸血鬼でも退治するかのように叩いて打ち込んだ。全く理解し難い行動だ」

喜多島さんは憤然として言った。犯人に対する怒りなのだろう。

法子は温室に近づきながら、

「余程怨みがあるのかも知れませんが、それと」

と振り向いた。私もそれに応じて立ち上がり、法子を見た。

「それと？」

法子も私に目を向けて、

「短剣の持ち主に罪を着せようとしているのかも」

「ええっ!？」

私はまた驚いてしまった。先輩が容疑者になりかかっていると考えていたら、今度は冤罪!？ もう、どうなってんのよ!？

「この家、なかなか家庭事情が複雑で、難しいからな」

喜多島さんは溜息まじりに言った。

「確かに……」

法子も真剣な顔で呟いた。そして、

「ありがとう、おじ様」

「いやいや。どういたしまして」

法子は私を促しながら、

「じゃ、おやすみなさい」

「うむ。おやすみ」

私達は、庭園を抜けてガレージに向かった。

「このまま帰っちゃうの、法子？」

私が言うと、法子は、

「今日はこれ以上長居をしても仕方ないわよ。それに、明日は講義があるのよ。早く帰って、お風呂に入って寝なくちゃ」

「ええっ！？ 明日、大学に行くつもりなの？」

私が仰天して尋ねると、法子は目を見開いて、

「行かないつもりなの？」

「そ、それは……」

「今日は私の部屋に泊まりなさい。一人で帰るの、怖いでしょ？」

「え、ええ」

そう言われると、本当に怖くなってしまっのが私なのだった。とにもかくにも、全ては明日になってからだ。

翌朝になった。

私達は法子が作った朝食を食べ、しばらく話をしてから、大学へと向かった。

大学は法子のアパートから歩いて10分くらいのところにあるのだが、そのとてつもなく広いキャンパスの中の、法学部棟はほぼその中央にあるので、逆に大学の正門を入ってからの方が時間がかかる。

私達の通っているこの大学には、法学部を始め、商、経、医、文とたくさん学部がある。たぶん、都内では最大級の、テーマパークみたいな広さを誇る大学だろう。

「何よ、11時からって、英語じゃないのオ。私、パスしたいくらいよ」

私がロビーに入るなりグチると、法子は、

「ぼやかないの。英語くらい、何よ」

「だってさア、あの先生、なーんか私に怨みでもあるんじゃないかっていうくらい、指名するじゃないのよ」

私は反論した。すると法子はニコニコして、

「彼、律子に気があるって噂よ」

私はザワザワツと全身が総毛立った。

「じよ、冗談じゃないわよ！ あーんなオジさんに惚れられたら、とんでもない迷惑だわ」

「フフフ、そうね」

法子は人の気も知らないで、楽しそうに微笑んだ。その時、

「おはようございます。こちらでしたか」

と声をかけて来た人がいた。法子と私は、声の主の方を見た。そこには藤江刑事が立っていた。

「あら、藤江さん」

法子がニツコリして言うと、藤江刑事は頭を掻きながら、

「す、すみません、こんなところにまで押しかけて。ちよっとお尋ねしたいことがあったもので……」

「そうですね。じゃ、あちらで」

法子は右手で二階へ行く螺旋階段の脇にある長椅子を示した。

「はア、わかりました」

私達は長椅子に腰掛けた。藤江刑事は当然法子の隣に座った。(

別にヤキモチじゃないんだから！)

「どんなことですか？」

法子は、ロビーに不似合いな藤江さんを見つめて通り過ぎる学生達を気かけながら言った。

「はア、実はそのオ、貴女方と喜多島警視とは、どういづご関係なんでしょうか？」

藤江刑事も周囲を気にしながら尋ねた。法子はクスツと笑って、
「何だ、そんなことだったんですか。喜多島さんとは実家が近所なんです。小さい頃からの知り合いで、たまに警視庁まで遊びに行つたこともありますよ」

と答えた。藤江刑事はすっかり驚いて、

「そ、そうなんですか。それはすごいなア。自分から見れば、喜多島警視はまさに雲の上の存在ですからねエ」

ちよつと大袈裟に聞こえるが、実際そうなのだ。巡查の藤江さんが見れば、それより4階級も上の人なのだから。タテ社会の公務員にとつて、4階級も上の上司は、とんでもない存在だろう。

「全然すごくないですよ。たまたま家が近所だけなんですから」

法子は笑って否定した。そして、

「そんなことを聞くために、わざわざここまでいらしたんですか？」

と尋ね返した。藤江刑事は苦笑いをして、

「いえ、違います。他に聞きたいことがあるんです」

と答えた。法子は真顔になって、

「どんなことでしょうか？」

「裕子さんのことなんですが……」

藤江刑事は、何となく話し辛そうに言った。法子は彼の顔を覗き込むようにして、

「先輩が何か？」

藤江刑事は法子の顔があまりに近くにるので、少し赤くなりながら、

「あ、あの、彼女は普段はどんな女むすめなんですか？」

「普段ですか？ 普段は明るくて利発で、素敵すてきな女ですけど」

法子は微笑んで答えた。藤江刑事はまた頭を掻きながら、

「そ、そうですね……。そ、それで、彼女から何か聞いていませんか？ 事件のこととか……」

「どうしてですか？」

法子は再び尋ね返した。藤江刑事は、

「いや、その、彼女、ほとんど話してくれないんです。まあ、状況としては、かなり不利なので、口を噤しむみたくなるのもわかるんですけどね」

「不利？ 不利って、どういう意味ですか？」

法子は少しキツとして言った。彼女が「怒」の感情をちよつとも見せるなんて、すごく珍しいことだ。それに気づいたのか、

「あの予告状のことですよ。あれ、裕子さんの部屋のパソコンで打ったんですよ。しかも、彼女の部屋のどこにパソコンがあるのか知っているのって、彼女の他に死んだ朝比奈さんだけだと言っし……」

と藤江刑事は恐る恐る言った。あちゃー、そんなことまでわかったのか。先輩、確かに不利よね。

「でもあの予告状を出したのは、先輩ではないかも知れないのですよ」

法子はそれでも怯まずに反論した。知らないぞ、藤江さん。彼女と議論して勝てる奴なんて、そうはいないんだから。そんな私の心配をよそに、藤江刑事は、少々ムキになってしまったのか、
「しかし、凶器の短剣も裕子さんのものですし、死体の第一発見者も彼女なんですよ」

「そうですね、あの短剣を朝比奈さんの背中に打ち込んだものはまだ見つからないのでしょうか？」

「そ、それをどうして……」

藤江刑事はかなり動揺したようだ。法子は容赦しない。

「それに、高林先生はどうしたんですか？ 朝比奈さんと高林先生が一緒だったのは、浩一さんも見ているんですよ」

「そ、それは……」

藤江刑事はついに言葉に詰まってしまった。ほおら、ごらんなさい。法ちゃんと口論して勝とうなんて、一億年早い！ なーんて、私が威張ることじゃないか。

「そ、それじゃ、私はこれで……」

何か気の毒なくらい落ち込んで、藤江刑事は去って行った。私は法子を見て、

「やり過ぎなんじゃない、法子？」

「そんなことないわ。警察の人って、疑わしい人物はすぐに犯人扱いでしょ。松本サリン事件だって、公式にはお詫びの一つもないじゃない」

法子は、権力をカサに着て偉そうにする奴が嫌いだ。彼女らしくて素敵なんだけど、ちよつと怖いよね。

「それより律子、英語の授業が終わったら、医学部の方へ行ってみない？」

「えっ、医学部？」

「そう。法医学の勉強のためにね」

法子はいたずらっぽく笑った。あっ、そうか、藤江刑事が大学に来たのは……。なーるほど。

「さっ、早く行きましょ。でないと、一番前の席しか空いてなくなっちゃうわよ」

法子はエレベーターの方へ歩き出しながら言った。

「そ、それだけはカンベンしてほしいわ!」

私もエレベーターに向かった。

英語は最悪だった。

私達が教室に到着すると、すでに席は最前列の、しかも教壇の真ん前しか空いておらず、仕方なく私達はそこに座った。と言うより、私は、と言った方が正しいか。

おかげで私は、親愛なる英語の先生と、まるでマンツーマンのような感じで、授業を受けたのだった。

「もう、最低!」

私が教室を出るなり叫ぶと、法子はニコニコしながら、

「まアまア。そう怒らないで。人に好かれるのって、悪いことじゃないわよ」

「何よもう! 法子は藤江さんが相手だからいいだろうけどさ」

と私が言うと、法子はキョトンとして、

「えっ? 藤江さんが、どうかしたの?」

そうそう、法子って、そういうの、疎いのよね。大学にも何人が法子にモーションかけて来る男の子がいるんだけど、当の法子は全く無関心と来てるから、みーんなふられたと思って、引き下がっちゃうのよねエ。

「彼、法子のこと、好きなんじゃない?」

私はニヤニヤして言った。すると法子はクスクス笑って、

「まっさかア。私みたいにすぐ口論したがる女なんて、好きになったりしないわよ」

と言った。でも、そんな法子が可愛いって言う男共もいるのよねエ。

哀れなのは、藤江さんか。

私達は、とりあえず、食堂で昼食をすませてから、医学部棟へ向かった。

医学部棟は、キャンパスの東の端にあり、法学部棟から500mくらい離れている。

「遠いなア。キャンパスの中に、カートでもあればいいのに」

歩くのが嫌いな私がそうグチると、法子は、

「何言ってるのよ。20歳の女の子が言うセリフじゃないわよ」

「へーい」

私は肩を竦めて、仕方なく応じた。

医学部棟のロビーに到着した。制服警官がうろろしており、私服刑事らしき人達も何人かいた。医学生達は迷惑そうに彼等を避けながら、それぞれの教室に向かっていった。

「こりゃ、入れてもらえないわね」

と私が言うと、法子はニツコリして、

「私達が入れなくても、何でも教えてくれる人がいるじゃないの」

「ああ、そうか」

法子は、喜多島さんを当てにしているのだ。

検死官は現場で監察医（俗に言う検死医）より先に死体を視る。そして解剖にも立ち会う。その辺のことが知りたかったら、藤江刑事のような若造を相手にするよりは、喜多島さんの方がずっといいのだ。

ここ八王子市には、監察医は常駐していない。だから三多摩地区の医学部の法医学教室が解剖を請け負うことになる。本来なら、私達の大学にその役目が回って来ることはないのだが。警視庁の委託している大学は決まっているはずなのだ。今回はどうしたのだろう

？

「おじ様が現れるまで、ここで待ちましょ」

私達はロビーの一角にあるソファに座り、慌ただしく駆け回っている警官達を眺めていた。

「やっぱり来てますね」

喜多島のおじ様より先に、森尾さんが私達を見つけて近づいて来た。

「どうも。好奇心が旺盛なものですから」

法子は微笑んで応えた。森尾さんもニッコリして向かいのソファに座り、

「浩一さんが早く遺体を返せってうるさいんですよ」

「はア、そうですか」

法子は森尾さんがグチを言いたいのをこれ幸いと、いろいろ訊き出すつもりらしい。森尾さんは煙草に火を着けてしまってから、

「あつ、かまいませんか？」

と私達に尋ねた。そう聞かれて、「ダメ！」と言うほど、私達はヒステリックな嫌煙権論者ではない。

「どうぞ、お吸いになって下さい」

法子はニコニコして答えた。森尾さんは頭を掻きながら、

「いやア、どうも周りの人への気遣いが足りなくていけません」

と言い、煙を私達にかからないように吐き出した。そして、

「それで、この大学の付属病院に、朝比奈さんの主治医でもあった大崎育男助教授がいらっしゃるので、その人に頼んでくれとまで言われましてね」

「まア」

法子は少し大袈裟に同情してみせていた。森尾さんは煙草の灰を灰皿に落として、

「いずれにしても、こちらの法医学教室に頼むつもりでしたからね。何も支障はなかったんですがね」

法子はわざと私を見て目を見開いた。全く、この娘^こってば、お茶

目なんだから！

「高林先生はどうされましたか？」

法子が尋ねると、森尾さんは一瞬ビクンとしたが、

「あ、高林先生ですか。まだ行方不明です。事務所にも自宅にも帰っていません。一応非公開で捜索は続けていますがね」

「そんなこと、私達に話しちゃって大丈夫なんですか？」

法子がいたずらっぽく言うと、森尾さんは苦笑いをして、

「世の中、何事もギブアンドテイクですからね」

「えっ？」

今度は法子がキョトンとして私を見た。私もキョトンとして法子を見た。森尾さんはニヤツとして、

「中津さん、貴女が知っていること、みんな教えて下さい。あの予告状のこと、裕子さんのこと、高林先生のこと、朝比奈さんのこと

……」

あちゃア。藤江刑事め、森尾さんに言いつけたな。森尾さん、可愛い部下の敵討ちを買って出たのね。

「藤江さんが何か言ったんですか？」

私が訊こうとしたことを、法子が訊いてくれた。森尾さんは煙草を灰皿でもみ消して、

「そうじゃありませんよ。私も、昨夜貴女方から訊きもらったことがあったものですから」

「言い、真顔になった。そして、

「予告状の差出人のところに ” 殺人予告者 ” とプリントしたのは誰か、知っていますね？」

法子はその問いに少しも動揺した様子を見せずに、

「知ってはいません。そうではないかと思っっている人がいる程度です」

「誰ですか、その人は？」

森尾さんは身を乗り出して尋ねた。法子はクスツと笑って、

「森尾さん、私にカマをかけてらっしゃるんですか？」

「えっ？」

森尾さん、凶星を突かれたらしく、ビクツとした。法子は微笑んだまま、

「それは朝比奈さんだということ、もう御存じなんでしょう？」

「は、はは、参ったな。見抜かれてましたか。どうも私は演技派じゃないなア」

森尾さんは照れ隠しのようなことを言いながら、二本目の煙草に火を着けた。

「本人は死んでしまつて直接確認することはできませんが、裕子さんに予告状を見せて問いつめた時の反応で、ほぼわかりました。あの女が庇^ひつとしたら、父親である故人以外、いませんからね」

森尾さんは煙を吐きながら言った。法子はその流れて行く煙を目で追いながら、

「先輩は、朝比奈さんが差出人のところをプリントしたことを認めたんですか？」

「いえ。決して認めませんでした。何日も前から、封筒ごとどこかへ行ってしまつていたし、パソコンが書棚の後ろにあるのを知っていた人は朝比奈さん以外にもいるかも知れないと言いましたね」

森尾さんの発言に法子は興味をそそられたようだ。彼女は森尾さんをジツと見つめて、

「裕子先輩には、他に何を訊かれたんですか？」

と尋ねた。すると森尾さんはハツとして、

「あれっ、いつのまにか私が訊かれる立場になつてるじゃないですか」

と言つて、法子を見つめ返し、

「今尋ねているのは、私ですよ、中津さん」

「はい」

法子はニコツとして、肩を竦めた。森尾さんもニコツと笑つて、

「さてと。それから、裕子さんがあの予告状を作成した本人なのは、彼女自身も認めているのですが、貴女にそれらしきことを以前話し

たことがありますか？」

「いいえ。あの予告状が届くまで、先輩がそんなことを考えているなんて全然知りませんでした」

法子は真顔になって答えた。森尾さんは煙草の灰を落としながら、

「では、貴女方は高林先生を見えていますか？」

「はい。廊下を朝比奈さんと一緒に歩いて行くのを見かけました」

法子は、どうしてそんなことを訊くのだろうという顔で言った。

私がそう感じたくらいだから、森尾さんも当然それに気づき、

「いえね。高林先生を見たと言うのが、浩一さんと裕子さんだけだと、高林先生が本当に来たのかどうか、疑わしいですからね」

「先輩と浩一さんが口裏を合わせているとでも？」

法子が尋ねると、森尾さんは煙草を揉み消しながら、

「そうは言いませんがね。一応あの二人は、仲が悪いとは言え、兄妹ですからね」

と言いつをした。そして、

「それから、朝比奈さんのことなんですが……」

「はい？」

法子は居住まいを正して言った。私も一緒になって居住まいを正した。森尾さんは身を乗り出して、

「貴女は、あの予告状を朝比奈さんにも見せていますね？」

「ええ。先輩から聞いたのですか？」

と法子は尋ね返した。森尾さんは肩を竦めて、

「そうです。で、どうなんですか？」

「はい、見せました」

「それで、その時の朝比奈さんの反応は？」

「落ち着き払っていました」

「そ、そうですか……」

森尾さんは少しガツカリしたようだ。しかし法子は、
「でもそれが変でした」

「はア？」

森尾さんはキョートーンとした。私も前へならえだ。法子はそんな私達の反応を尻目に、

「あの予告状を見て、何の反応もないなんて、妙でしょう？」

「そ、それはそうですね」

森尾さんは納得して頷いた。私も何となくわかったような気がした。法子はさらに続けた。

「でもここでまた大きな疑問に突き当たってしまいました」

「えっ？ 何ですか？」

森尾さんはますます身を乗り出して尋ねた。法子は森尾さんをジツと見て、

「もし、朝比奈さんがあの予告状に ” 殺人予告者 ” とプリントした本人なら、何故殺されてしまったのでしょうか？」

「あっ！！」

森尾さんのその声は、まさしく意表を突かれたゴールキーパーのそれと同じだった。私も驚いた。

言われてみれば、そのとおりだ。予告状の 「殺人予告者」 をプリントしたのが朝比奈さんなら、何故その朝比奈さんが殺されてしまったのだろうか？ これは難問だ。

「それは確かに、とんでもない疑問ですよ。また袋小路だな」

森尾さんは腕組みして考え込んでしまった。

「また？ またってことは、他にも何かあつたんですか？」

やっと私は会話に入れてもらえた。森尾さんは私を見て、

「高林先生の存在ですよ」

「高林先生の？」

私はまた例の話かな、と思って法子を見た。しかし森尾さんの話は私の予想を裏切った。

「浩一さんの話だと、高林先生は、10月 8日にも来ているそうなんです。でまた10月10日にも現れた。朝比奈さんはどうしてそんなに頻繁に高林先生を呼んだのだろうかということなんです」

うーむ、確かに。翁が危ないというのならともかく、何故今そんなに何度も呼ぶ必要があったのだろう？

「10月 8日以降から10月 10日以前までで、何かあったのかも知れないと思って調べているんですが、誰に訊いても何も掴めないというような状態ですね」

森尾さんは、ホトホト疲れたというふうに、大きく肩を竦めた。法子も思案顔で、

「事件と何か関係があると考えた方がいいですね」
「ええ」

森尾さんはまた腕組みをした。するとそこへ、
「主任、すみません」

と藤江刑事が現れた。彼は気まずそうに私達に会釈し、森尾さんに耳打ちした。森尾さんは立ち上がった、

「申し訳ありませんでした。では、これで失礼します」
と言うと、藤江刑事とともに廊下を歩いて行ってしまった。それを見届けてから、法子は、

「こつも考えられるわよね」

と呟くように言った。私はピクンとして彼女を見た。

「えっ？ 何！？」

法子は真顔のまま私を見て、

「朝比奈さんは高林先生を殺そうと思って呼んだ。でも逆に自分が殺されてしまった」

「で、でも、それじゃ、前に法子が言った別の疑問に……」

「共犯者がいるのかも知れないわよ」

「あ……」

私は朝比奈さんが予告状に「殺人予告者」とプリントした本人なのに殺されてしまった理由は、それ以外に考えられないと思った。ところが、我が親愛なる法ちゃんは、

「だけど、それもちよつと変よね」

「えっ？」

私はまたキヨトンとした。法子は私をジッと見て、

「だって、朝比奈さんは睡眠薬を飲まされて殺されたのよ。立場が逆じゃない？ しかも、二人の飲み物は、コーヒーと紅茶で、すり替えるわけにはいかないのよ」

「そ、そうね」

私は考え込んでしまった。法子はさらに追い討ちをかける。

「それに、共犯者はいつ朝比奈さんに近づいたのかしら？ 浩一さんが部屋を出てから、裕子先輩が朝比奈さんの遺体を発見するまでの間、出入りできた人って誰がいる？」

「うーん、いるような、いないような……」

私が首を傾げていると、法子は、

「先輩が共犯者だったら、可能なのよね」

と爆弾発言をした。私は仰天して、しばらく何も言えないでいた。

「でも、それも考えられないわ」

法子は、自分の仮説を一つ一つ否定していく。彼女の頭脳が、今凄まじいスピードで事件を分析している証拠である。

「先輩が居間を出てから私達が駆けつけるまでの間に、朝比奈さんに睡眠薬を飲ませ、短剣を背中に打ち込み、その打ち込むのに使ったものをどこかに隠し、悲鳴をあげて気を失ったふりをするなんて、ではしないわ」

法子は右手の人差し指で鼻の頭を突きながら言った。

「そうよねエ……」

裕子先輩が犯人でないらしいのがわかったのは良かったが、まだ疑問はたくさんあった。一体犯人はどうやって朝比奈さんを殺したのだろうか？ そして高林先生はどこへ行ってしまったのだろうか？

それからかなりたって、やっと喜多島さんがロビーに現れた。彼は私達に気づくと、軽く右手を挙げて、近づいて来た。

「やア、法ちゃんに律子さん。やっぱり来ていたんだね」

「どうも」

私達は異口同音に応えた。喜多島さんは森尾さんが座っていたソファに腰を下ろし、

「まだ解剖は終わっていないんだが、知りたいことはすべて判明したので、出て来たんだよ」

と言った。法子が、

「何か新しいことがわかったんですか？」

「ああ。犯人の奴、思っていた以上にガイシヤを恨んでいたらしい」

「えっ？」

法子は私の顔を見た。そして、

「どういうことですか？」

喜多島さんは煙草に火をつけながら、

「ガイシヤは短剣で刺された後、後頭部と右脇腹、右脚、左脚と鉄の棒のようなもので殴られている」

「えっ!?!」

さすがの法子もギョツとして私と顔を見合わせた。喜多島さんは煙をフワツと漂わせながら、

「検視では発見できない程度のものだった。死んでから少したって、生活反応がなくなった頃、殴っているようなんだ。つまり、死してなお許せない思いがあった、ということなのかな」

「……」

喜多島さんは呆気にとられている私達を見ながら、話を続けた。

「最初、現場で検死をした時、身体のおちに妙なへこみがあるのを見つけていたんだが、まさか殴った跡だとは思わなかったんで

ね

「それで、睡眠薬の方は？」

と法子がやつと口を開いた。喜多島さんは煙草をくわえたまま、

「モルヒネだ」

「モルヒネ？ 麻酔に使う？」

法子は少し驚いたようだ。私はもつと驚いていたが。喜多島さんは軽く頷いて、

「こいつは一般人には入手困難な代物だ。こんなモノを使う奴は、自ずと限定されてくる」

「犯人は、大きな足跡を遺したつてわけね」

法子は腕組みをして、独り言のように言った。喜多島さんは煙草の灰を灰皿に落として、

「そうだね」

と同意した。そして、

「法ちゃんが気にしていた死亡推定時刻だけど、私が検視で下したものとほぼ同じになるようだよ。モルヒネがどの程度ガイシャの死に影響を与えているか判明すればね」

「そうですか」

法子は何となく気のない返事をした。そして、

「それから、現場にあった、二種類の煙草の吸い殻なんですけど」

「ほオ、そんなものにまで気づいていたのか。さすがだな」

喜多島さんはちよつとニヤツとしてから、

「君の考えている通りかどうかわからないが、キャビンマイルドからは朝比奈さんの血液型と同じA型が、そしてハイライトからは、高林先生の血液型と同じAB型が検出された」

と教えてくれた。法子は頷きながら、

「おじ様もお気づきだったでしょうけど、あの吸い殻、妙に乾いていませんか？」

「そうだな。何時間か前に吸われたものとは思えない程、カラカラに乾いていたな」

あれ？ そうだっけ？ 私、全然気づかなかったわ。すると喜多島さんが、

「犯人の偽装工作の可能性がある、ということか」

と呟くように言った。私はハツとして喜多島さんを見た。法子は大きく頷いて、

「そうですね。でも、何のためなのかはわからない」

「うむ。目的は不明だな」

もしもあの吸い殻が犯人の偽装工作だとすると、一体どういうことになるのだろうか？

「おっ、終わったらしいな」

喜多島さんは、ロビーにゾロゾロと戻って来た森尾さん達に気づいて立ち上がった。すると法子が、

「ねエ、おじ様、解剖を担当した大崎先生と話ができないかしら？」

「

と尋ねた。喜多島さんは一瞬考えるような仕草をしたが、

「何とかなるだろう。我々の方ももう用はすんだからね。あとは法ちゃんの腕次第だな」

と言つて、ニヤニヤした。法子は目を見開いて、

「それ、どういう意味ですか？」

喜多島さんは、笑いながら、

「大崎先生は、まだ20代の若い医師だ。なかなかの男前でね。法ちゃんのことを気に入ってくれば、何でも話してくれるよ」

法子もクスツと笑つて、

「あら、それじゃ、何も話してもらえないかも知れませんか」

と応えた。喜多島さんは右手で別れの挨拶をしながら、森尾さん達の方へ近づいて行った。

「大崎先生つて、いい男なんだ」

私が思い出したように言つと、法子は、

「律子、鼻の下が伸びてるわよ」

とニコニコして言った。私は赤面して、

「な、何よもう」

法子はしばらく微笑んでいたが、やがて真顔になって、

「とにかく、大崎先生に会ってみましようよ。彼がいい男かどうかは別にして」

「ええ、そうね」

私もマジメな顔になって言った。

私達は医学部棟の奥にある法医学教室に向かった。

「あっ！」

廊下の向こうを歩いている若い医師の姿を見つけて、私は叫んだ。法子も気づいたようだ。

「大崎先生！」

法子はいきなり声をかけた。すると廊下を歩いていた若い医師は、その声に応じて立ち止まり、振り向いた。

「すみません、大きな声を出して」

法子は、若い医師に近づきながら言った。その医師は私達を医学部の学生ととも思ったのか、

「質問なら、手短かに頼むよ。これから解剖の結果をまとめなければならぬんだ」

と応えた。おっ！ 確かに素敵なマスク。背も高いし、彫りも深い。眉もキリッとしていて、ホントにいい男だわ。

「すみません、お忙しいのに。私、朝比奈裕子さんの後輩で、中津法子と言います。そして、この娘は私の友人で、神村律子です」

法子がそう言うと、大崎先生は少々びっくりしたように法子を見つめた。そして、

「裕子さんの後輩の……。では、朝比奈さんの遺体発見を警察に通報したのは、貴女ですか」

と急に丁寧な口調で話しかけて来た。法子は微笑んで、

「そうです」

「それで、私にどんなご用ですか？」

大崎先生は抱えていた書類を持ち直して尋ねた。法子は、

「朝比奈さんの容態はどうだったのですか？ 倒れられた時の」

「ああ、そのことです。朝比奈さん本人もよくわかってらっしゃったでしょうけど、命にかかわるような状態ではなかったのですよ。それなのに、弁護士を呼んで遺言状まで作成して……」

大崎先生は少し苦笑しながら言った。法子はさらに、

「遺言状を？ 入院中にですか？」

「そうです。私に立会人になってくれ、と言われたのですが、辞退しました」

「どうしてですか？」

法子の質問は、澁みなく続く。大崎先生は小さく溜息をつくと、
「医師として、公正な立場でいたかったからです。私は、朝比奈家の主治医ですから、どなたとも顔を合わせる機会がありますので」

法子は軽く頷いた。なるほど。あの浩一や礼子に遺言状の内容について追求されれば、この人の好きそうな大崎先生は、口を噤み通せないだろうからなア。

「それから、朝比奈さんが飲まされたモルヒネなんですけど」

と法子が言うと、大崎先生、まるで死刑執行の日の囚人みたいにギクツとして、青白い顔になり、法子を見た。

「モ、モルヒネが、何か？」

あんまり大崎先生の反応が凄かったので、法子もちよつとびっくりしたらしい。

「あ、あの、モルヒネって、一般の人、例えば私達のような立場の人間でも、手に入れられるんですか？」

法子らしくない言い方になってしまった。大崎先生は深呼吸をするように大きく息を吸ってから、

「そ、そうですね。今は中高生や主婦にまで、麻薬や覚醒剤が浸透していますからね。手に入れようと思えば、手に入れられるんじゃないですか」

と答えた。法子はその答えに不満があるような顔をしていたが、

「それから、短剣のことなんですけど」

「短剣？ ああ、凶器ですね。それが何か？」

大崎先生、ハンカチで額の汗を拭い、手の汗で張りついた書類を引き剥がしながら言った。

「あの短剣は、一体何回叩かれて打ち込まれたのですか？」

と法子が尋ねると、大崎先生は半分上の空のような顔をしていたが、ハツとして、

「あ、ああ、そうですね。刺創と凶器の厚さ、長さ、幅から考えて、10回近く叩かれたのではないかと思います」

「そんなに！？」

法子と私は、思わず顔を見合わせた。大崎先生は、

「それくらい叩かないと、あの短剣では背中から心臓を貫くことはできませんよ。何しろ、刃がついていませんからね」

「そうですね」

法子はしばらく思案顔をしていたが、

「生前の朝比奈さんはどんな方でしたか？」

大崎先生は一瞬キョトンとしたが、すぐに気を取り直して、

「そうですねエ、プロにはプロとして接してくれる方、というのは、わかりにくいですか？」

「ええ、ちよつと……」

法子はニッコリして応えた。大崎先生は頭を掻きながら、

「あの方は、とにかく他人にも自分にも厳しい方でした。私にも、医者としてベストを尽くすようにいつもおっしゃって下さって」

「なるほど」

法子は頷きながら大崎先生の目をジッと見つめていた。大崎先生もそれに気づいて、

「あの、何か他にお訊きになりたいことでも？」

と尋ねた。法子は微笑んで、

「いえ、もうお訊きしたいことはみんな訊かせていただきました」

「そうですね。では、私はこれで」

「ありがとうございます」

大崎先生は私達に軽く頭を下げて、去って行った。

「やるウ、法ちゃん」

私が冷やかし半分に言うと、法子はクスクス笑って、

「何よ、律子」

「だってさ、大崎先生にあんなにいろんなこと喋らせちゃうんだもの。先生、法子のこと、気に入ったんじゃないの？」

私は実際そう思って言った。でも当の法子は全然そんなこと思っていないらしく、

「何言っているの」

と笑って廊下を歩き出した。そして、

「今日は講義サボっちゃおうか？」

と呟くように言った。私はまア珍しいという顔で、

「え、どういう風の吹き回し？」

法子は真顔になって、

「先輩に会いに行きましょうよ」

「先輩に？」

私はおうむ返しに尋ねた。法子は大きく頷いて、

「そう。きつと先輩、すごく悲しんでいると思うの。だから、私達ではげましてあげましょうよ」

「そうね。それがいいわね」

「ねっ？」

法子はニコツと笑った。よく見る笑顔だが、こういう時の彼女の笑顔は、本当に気持ちが良いなる。

「その前にもう一度、喜多島のおじ様に会って、確かめておかないかならないことがあるわ」

「喜多島さんに？」

「ええ。行くわよ、律子」

法子は少し歩を速めてロビーに向かった。

「あっ、待ってよ、法子オ！」

私は小走りで法子を追いかけた。

私達がロビーに戻ると、まだ森尾さん達と喜多島さんがあたりをウロウロしていた。

「おじ様！」

法子が声をかけると、喜多島さんばかりでなく森尾さん達までもが法子を見た。私はちよつとたじろいだが、法子はそんなことはないらしく、喜多島さんに近づいて行った。

「おじ様、ちよつといいですか？」

「何だい、法ちゃん？」

喜多島さんは法子に誘われるまま、ロビーの隅に歩いて行く。森尾さん達はそれを横目で見ていたが、ついてくる様子はなかった。

法子はそれでもあたりをはばかりるように、

「いくつかお尋ねしたいことがあるんです」

「まだ何かあるのかね？」

喜多島さんはニヤリとして尋ねた。法子は軽く頷いて、

「ええ。礼子さんと松子さんのことなんですけど」

「礼子さんと、松子さんね」

「そうです。礼子さんは犯行時刻頃、どこにいたのですか？」

法子は尋ねた。すると喜多島さんは考えるようにして眉を寄せた。そして、

「確か、居間の脇のサンルームにいたと言っていたよ」

「そうですか。松子さんは？」

「松子さんは、庭園で山本さんと話をした後、ロビーに入って来たところで君達に会ったと言っている」

と喜多島さんが答えると、法子は、

「それで、その証言を裏付けるようなことは？」

「どちらも弱いね。松子さんと話をしたのは、山本のじいさんも証言しているが、その前に松子さんがどこにいたのかは知らないし、

礼子さんがサンルームにずっといたのを見た人はいない。しかもサンルームは外への出入りもできるからね」

「つまり、お二人共、アリバイがない、ということですか？」

法子が念を押すように尋ねると、喜多島さんは頷いて、

「そういうことだ。でもアリバイがないのは、浩一さんも裕子さんも同じことだ。二人も犯行時刻頃、どこにいたのか誰も証明してくれる者はいない」

「そうですね。それと、警察では外部の者の犯行というケースは考えていないのですか？」

法子のその問いに喜多島さんは苦笑いをして、

「テレビの刑事ドラマじゃないんだから、思い込みの激しい主任警部が、独断専行で容疑者を絞り込むなんてことは、現実にはありえないことだよ。警察は全てのケースを想定して動く。もちろん、通り魔的犯行も考えている。今回の場合、その可能性は低いけどね」

「では、高林先生の行方はわかりましたか？」

と法子が尋ねると、喜多島さんは痛いところを突かれたような顔をして、

「いや、まだわからない。立ち寄りそうな所や自宅の周辺、事務所の近所、いろいろなところを捜しているが、見つからない」

「警察は、高林先生をどう扱いで捜しているんですか？」

法子は喜多島さんをジッと見つめて尋ねた。私も喜多島さんを見た。喜多島さんは、

「重要参考人だよ。高林先生が一番最後まで朝比奈さんと一緒にいた人物だからね」

「いえ、そういうことじゃないんです。高林先生の生死について、どう扱う扱いで捜しているのか、ということですよ」

と法子が発言すると、喜多島さんはびっくりして、

「法ちゃんが高林先生が死んでいるかも知れないと思っているのか？」

「ええ。いえ、高林先生は亡くなっているに違いないと思っています」

す

私は思わず喜多島さんと顔を見合わせてしまった。

「法ちゃん、君は一体……」

喜多島さんはそこまで言って絶句してしまった。法子は、

「おじ様、どうもありがとございました」

と言うと、ペコリとお辞儀をして、スタスタとロビーを出て行きかけた。

「待ってよ、法子！」

私も法子を追って、医学部棟を出た。

「法子、どういことよ？」

私が息をはずませながら言うと、法子は前を向いたまま、

「律子、先輩に会いに行くわよ。そして……」

と意味ありげに口を噤んでしまった。私も敢えてそれ以上聞こうとせず、法子の後から歩いて行った。

私達は一旦法子のアパートまで行き、そこから彼女の愛車で朝比奈家へ向かった。

「ねエ、法子」

と私が話しかけると、法子は、

「ごめんね、律子。しばらく話しかけないで」

と真剣な顔で前を見たまま応えた。私は仕方なく前に目を向けて黙った。

朝比奈家に到着すると、門の所に「朝比奈長次郎お別れ会」という大きな立て看板があった。

「お葬式はまだみたいね」

私が言うと、法子は、

「まだ御遺体に戻っていないもの。それに、故人の遺志で、しないのかも知れないしね」

私達は車をガレージに駐めると、正面玄関には弔問客がたくさんいるようなので、裏口に回り、キッチンから入った。

「大変ですね」

法子はキッチンで料理のキリモリをしている三池さんに声をかけた。他に何人か女性が手伝いをしていたが、朝比奈家の縁者の人達だろうか。

私達はキッチンを抜け、ロビーに出ると、他の人の目を避けるようにして階段を上がり、先輩の部屋に向かった。

「どうぞ」

法子のノックに伝えて、先輩の弱々しい声が聞こえた。

「失礼します」

私達が入って行くと、裕子先輩は暗く沈んだ顔を少しだけほころばせて、

「来てくれたの……」

とか細い声で言った。先輩は椅子に静かに座っていた。ワンピースの喪服がいつもと違った美しさをかもし出しているような気がしたのは、私だけだろうか。

「夕べは申し訳ありません。挨拶もキチンとしないで帰ってしまつて」

法子が頭を下げて言うと、先輩は微笑んで、

「いいのよ。でも……。ありがとう、今日も来てくれて」

と応えた。私達も皮張りの椅子に腰を下ろした。

「先輩、お察しします。お父様を亡くされた上、家族の中に犯人がいるかも知れないなんて」

法子が気遣うように声をかけると、裕子先輩は、

「ええ。父が亡くなったことも悲しいけど、犯人が家族の中にいるかもしれないというのは、もっと悲しいわ」

「そうですね」

法子も少し目を潤ませている。私なんかもう、泣き出す寸前だ。堪えるのがとても辛い。

「それより、ここへ来たっていうことは、私に何か訊きたいことがあるんじゃないの？」

先輩は作り笑いをして、法子を見た。法子はちょっとバツが悪そうに、

「はい、そのとおりです。でも、それも犯人を捕まえるためなので……」

「犯人を捕まえる？」

先輩はビックリしたようだった。法子は頷いて、

「はい。おぼろげながら、この事件のトリック、見えて来ました。もう少しで、解けると思っています」

「そう……」

先輩はやや微笑んで言った。法子は小さく溜息を吐いてから、

「ではお尋ねします。昨日、高林先生を出迎えた時、先輩はコンタ

クトレンズを着けていましたか？」

と尋ねた。私はキョトンとしたが、先輩はますます驚いた様子で、「着けていなかったけど、それが何か？」

「何故着けていなかったんですか？」

法子は間を置かず質問した。裕子先輩は、

「私、コンタクトレンズをどこかに置き忘れてしまったのよ。だから昨日は、朝から着けていなかったわ。それにメガネもどこかにしまいなくしてしまっただけ」

「じゃあ、ガレージで私達と会った時も着けていなかったんですね？」

法子は続けて尋ねた。先輩は頷いて、

「そうよ。あの時も、すぐそばまで行って、やっと貴女達だったわかったんだから」

「そうですか？」

法子は妙に納得したように頷いた。そしてさらに、

「それから、朝比奈さんはあの時、先輩に飲み物を持って来るようにおっしゃいましたよね？」

「え、ええ。そうだったわね。それで？」

先輩は確かめるように法子を見た。法子は、

「何故朝比奈さんは、先輩に頼んだのでしょうか？ キッチンには三池さんがいらしたはずですし、インターフォンもキッチンにあったはずなのに」

それは私も思ったことだ。私は興味津々の顔を先輩に向け、回答を待った。

「私にもわからないわ。居間にいる私にわざわざ頼む理由なんてあるのかしら？」

先輩自身もよくわからないらしい。法子は突然質問を変えた。

「大崎先生は、よくここにいらつしやるんですか？」

「大崎先生？ ああ、医学部のね。よくいらつしやるわよ。父ばかりでなく兄もよく呼んでいるから」

先輩は唐突な質問に多少呆気にとられながら、答えた。法子は浩一の名前を聞いてハツとした。

「浩一さんが？ どこか具合が悪いんですか？」

「どこも悪くないわよ。肉体的にはね。兄は父の容態をよく訊いていたわ」

「なるほど」

法子は合点がいったという顔で頷いた。私もよくわかった。おそらく父親の身体を案じてではなく、その逆だろう。

「松子さんとお話できますか？」

「松子さんと？ ええ、大丈夫よ。自分の部屋にいると思うわ」

先輩の答えに、法子は疑問を抱いたようだ。

「弔問客の方々は、どなたが接待しているんですか？」

「兄よ。もう、喪主気取りでね。それが嫌で、私も松子さんも、部屋に戻ったのよ」

先輩は不愉快そうに言った。あらあら、あのイジワル兄さんが仕切ってるのかア。それじゃ、一緒にいるの、ウンザリだよな。

「では、先輩も一緒に松子さんのところへ行ってくれませんか？」

と法子が切り出すと、先輩はニツコリして、

「ええ、いいわよ。私もちょうど会いに行こうと思っていたところなの」

と応えてくれた。

私達は先輩の部屋を出た。松子の部屋は翁の部屋の西側にある。

私達はそこまで行く間、いろいろ話をした。

「先輩、もうひとついいですか？」

法子が階段を降りながら尋ねた。先輩は法子を見て、

「ええ、いいわよ」

法子は先輩には目を向けず、一步一步踏みしめるように階段を降りながら、

「高林先生が昨日来た理由を知っていますか？」

「いいえ、知らないわ。高林先生が来るということは聞かされてはたけど、何をしに来るのかまでは知らなかったわ」

先輩も階段を見たまま答えた。法子はさらに、

「では、10月 8日に高林先生が来たのは何故か知っていますか？」

「それは確か、父が入院中に作成させた遺言状が完成したので、持つて来たって聞いてるけど」

「そうですか」

私達は階段を降り切ると、ロビーにごった返している弔問客の間を縫うようにして居間の前の廊下に出た。

「そう言えば、昨日は門の所に警備の人がいませんでしたけど、今日はいましたね。昨日はどうしたんですか？」

法子が尋ねると、裕子先輩も小首を傾げて、

「言われてみると、確かにそうね。何で昨日はいなかったのかしら？」

と答えながら疑問を投げ返して来た。法子は思案顔になり、

「事件と関係がありそうですね」

と呟くように言った。

私達が松子の部屋に入った時、彼女は鏡台の前の椅子に腰を下ろしていた。喪服が妙に艶っぽいのは、彼女の魅力なのか、喪服そのものの持つ、一種異様な雰囲気のせいなのだろうか。なアんで妙に詩人ばいかな？

「申し訳ありません、奥さん」

法子が声をかけると、松子はゆっくりと私達の方を向いて立ち上がり、

「いえ、大丈夫です。先日は大変お世話になりました」と深々とお辞儀をした。裕子先輩が心配そうな顔で、

「もう身体の方は大丈夫ですか？」

と尋ねると、松子は作り笑いのような笑みを浮かべて、

「ええ、もう大丈夫です。ごめんなさいね、心配かけて」と答えた。そして、

「どうぞ、おかけになってください」

と、部屋の中央にある籐の椅子を勧めた。先輩と私達は、それぞれ椅子に腰を下ろした。松子も、やはり籐でできたテーブルを挟んで向かい合った籐の椅子に座った。

「私に何か？」

松子は少し潤んだ瞳で法子を見た。法子は頷いて、

「お疲れのところ、大変申し訳ないのですが、二三、質問させて下さい」

「はい、どうぞ」

と彼女は応え、居住まいを正した。法子は松子をまっすぐ見て、

「予告状を警察の人から見せられましたか？」

「はい」

「予告状について、何か朝比奈さんから聞かされていらっしやいませんか？」

法子が尋ねると、松子はキヨトンとして、

「え？ どういうことでしょう？」

「予告状は朝比奈さんが出したようなのです。ですから、そのことについて、何かお聞き及びびではないですか？」

「いいえ。あの手紙を見せられるまでは、私、全く知りませんでした」

と松子は軽く首を横に振って言った。法子はちよつと考えてから、

「では高林先生が昨日いらした理由は御存じですか？」

「いいえ。高林先生がいらっしやるのは主人から聞いておりませんが、その理由までは聞いておりませんでした」

松子は考え込むように目を伏せて答えた。法子はチラッと裕子先輩を見てから、

「奥さんは、裕子先輩の部屋にパソコンがあるのは御存じですか？」

「

「はい。昨日刑事さんから聞きました。ですから昨日までは知りませんでした」

松子は目を上げて答えた。法子はさらに、

「大崎先生のことなんですか……」

「大崎先生が何か？」

松子は少々訝しげに法子を見た。法子はそんなことは気にせず、
「大崎先生は、この屋敷によくいらしていたのですか？」

「はい。主人と浩一さんがよく呼んでいましたから」

松子はますますわからないという顔で法子を見ながら答えた。法子は、

「質問を変えます。高林先生は、10月 8日にもいらしている
そうですが、その時の来訪理由は御存じですか？」

「はい。確か、主人が入院中に作らせた遺言状が完成したので、それを
持って来て下さったのですわ」

と松子は言った。法子は頷いて、

「その内容について御存じですか？」

「

「いいえ、私、何も知りません。主人はその遺言状を自分の部屋に持って行き、金庫にしまっただけですから」

「金庫に？」

法子は先輩を見た。先輩は松子を見て、

「あの金庫は、父以外誰も開け方を知らないのですよね？」

「そうです」

松子も裕子先輩を見て答えた。先輩は法子に目を転じて、

「だとすると、高林先生の事務所に連絡して、遺言状をもう一度持つて来てもらわないとまずいわね」

「そうですね」

法子は遺言状のことには興味がないのか、何となく気のない返事だ。しかし先輩は、

「でももし、高林先生しか遺言状のことを知らないのだとしたら、本当に遺言状の内容がわからなくなってしまうわね」と独り言のように言い、

「とにかく、先生の事務所に問い合わせしてみるわ。このまま父の遺志がウヤマヤになれば、兄と姉の思う壺だから」

と立ち上がり、松子の部屋を出て行った。私はその時改めてこの部屋に電話がないのを知った。法子はそれを見届けてから、

「遺言状の内容について、それらしきことを朝比奈さんから聞いていらっしやいませんか？」

松子は小首を傾げるようにして、

「遺言の内容のことなのかどうかわかりませんが、主人はよく、『浩一と礼子には何も遺さん』と申しておりました」

「そうですか」

ということとは？ つまり、もし遺言状の内容がその通りだととしてそれを浩一と礼子が知ったとすれば、二人は間違いなくその遺言状を消滅させようとするだろう。まさか、あの……。うーん。

「奥さんは高林先生に昨日会われていますか？」

「いいえ。私、ちょうど先生がいらっしやる頃は、庭園で山本さん

と話をしていましたから。主人から、高林先生の接待は裕子さんがすると聞かされておりましたので」

あれ？ そうだとすると、朝比奈さんが先輩に飲み物を頼んだのは、最初から決めていたことだったのか。

「それから、昨日は門の所に警備の人がいませんでしたが、今日はいますね？ 何故か御存じですか？」

と法子が尋ねると、松子は考え込んで、

「さア、わかりませんわ。門の警備の人達は、主人の指示で動いておりますから」

「そうですか」

法子は私をチラッと見た。うん？ 何だろう？ そして彼女は、

「浩一さんのことなんですけど」

「浩一さんですか？」

松子は少し嫌そうな顔をした。法子は、

「浩一さんは、朝比奈さんの部屋に行ってから自分の部屋に戻ったようなのですが、奥さんはそれを見ましたか？」

「いえ。戻るところは見ていません。私、玄関から邸に入る時、

二階の浩一さんの部屋のベランダに浩一さんが立っているのを見たのです」

松子は思い出しながら答えた。その時、先輩が戻って来た。

「困ったわ。高林先生の事務所でも、父の遺言状の内容を知っているのは、高林先生だけみたいなの」

先輩は椅子に座りながら言った。私が、

「じゃあ、遺言状の内容は、朝比奈さんの金庫を開けるか、高林先生を見つけたす以外に知る方法がないってことですか？」

と尋ねると、先輩は私を見て弱々しく笑い、

「そういうことになるわね」

と答えた。そして目を潤ませて、

「でも、そんなことどうでもいい。父に、父に生きていてほしかった」

松子も涙声で、

「裕子さん……」

と先輩の手を取った。私ももらい泣き。法子は目を潤ませていたが、泣き出したりはしなかった。

「奥さん、どうもありがとうございました」

と言って立ち上がった。私もハツとして立ち上がった。先輩が法子を見上げて、

「帰るの？」

「はい」

先輩と松子も立ち上がった。法子は二人を見て、

「ここで結構です。お二人共お疲れでしょうから」

と言い、私を促して松子の部屋を出た。先輩と松子は、少々呆気にとられていたようだ。私も法子の態度はちよつと事務的だと思い、意見するつもりで、

「法子！」

と声をかけた。すると法子は、

「ちよつといい、律子？」

と言い、廊下の角まで私を引っ張って行った。

「な、何よ？」

私はますます法子の態度に不満を持ち、ムツとして言った。次の瞬間、私はびっくりして、それまでの自分の態度を恥じたほどだった。法子が、目から大粒の涙をポロポロとこぼしていたのだ。

「ごめん、少しこのままでいさせて……」

と言うと、彼女は窓の方を向き、しゃがみ込んでしまった。法子、必死に泣くのを堪えていたんだ。うづ……。また私も涙腺が。

「私って、冷たい女だよね……。他人ひとより悲しみが後から襲襲って来るんだもの」

法子は涙声で自嘲するような調子で言った。私はヒクヒクしゃくりあげながら、

「そんなことないよ。法子は冷たくなんかないよ」

と彼女の肩に手をかけて言った。法子のことを「こいつ、冷たいな」と思いかけていたということへの私の反省も込めた言葉だった。彼女はゆっくりと立ち上がって振り返り、

「ありがとう、律子」

と潤んだ瞳を向けてニッコリした。私は気まずいのと照れ臭いので、

「へへへ」

と笑った。

私達は、居間の前まで来たところで礼子に出会った。彼女はツンとした感じで法子に近づき、

「どう？ 貴女達の先輩は、罪を認めた？」

と尋ねて来た。法子はニコツとして、

「いいえ。先輩と松子さんの話を聞いて、この事件の大きな疑問が一つ解けました」

「疑問？ 何よ？」

礼子は私達の前に立ちはだかるようにして聞いて来た。法子は真顔になって、

「何故朝比奈さんは殺されたのか、という疑問です」

「フーン。犯人がわかったっていうことなの？」

礼子はまるで法子をバカにするかのような顔で言った。法子は首を横に振り、

「いえ、そうではありません。朝比奈さんは被害者になるつもりなどなかった、ということがわかったのです。そして、何故実際には被害者になってしまったのかも」

「何わけのわかんないこと言ってるのよ。バカなんじゃない、あんた？」

礼子は法子の話がチンプンカンプンなのを法子のせいにし、階段に向かって歩き出し、上がって行ってしまった。

「行きましよ、律子」

法子は礼子が二階に消えると、私を見て歩き出した。私も彼女を追いかけるようにしてロビーを通り、玄関から外に出た。

「もう来客の方々は帰ったみたいね」

法子が庭を見渡して言った。

「そうみたいね」

と私も庭を見渡した。すると法子が、

「あれが浩一さんの部屋ね」

と邸の二階のベランダのある部屋を見上げて言った。私もそちらに視線を向けた。浩一の部屋は先輩の部屋の倍くらいあり、ベランダには彼の性格からは想像もつかない花がたくさん飾ってあった。

「もし浩一さんが朝比奈さんの部屋からすぐに自分の部屋に戻ったのだとしたら、あの部屋の位置からだと、朝比奈さんの部屋が見えたんじゃないかしら？」

と法子は言った。私は頷いて、

「もしかすると、あのイジワル兄貴が、犯行を目撃しているかも知れないってことね」

「そうね」

法子はその時、庭園に山本のおじいさんがいるのに気づき、近づいて行った。

「山本さん」

法子は山本さんに声をかけた。彼は手拭いで手を拭きながら、「どうも」

と少しだけ微笑んで応えた。山本さんは翁と一番長いつき合いだったのだ。その悲しみは、先輩達と変わらないはず。

「今日は、大変だったでしょう？」

法子が言うと、山本さんは、

「いや、私なんか何もしてませんから。悦ちゃんは大変でしたよ、確かに」

悦ちゃん？ ああ、三池さんのことか。法子は山本さんに小声で、「いくつかがお尋ねしたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「え？ ええ、かまいませんけど」

山本さんは手拭いをズボンの後ろのポケットに入れながら応えた。「事件のあった頃、庭園で松子さんと会いましたか？」

「ええ、それは警察の方にもお話しました。確かに奥様にお会いしましたよ」

山本さんは答えてくれたが、やはり不思議そうな顔をしている。法子はさらに、

「ではその時、二階の浩一さんの部屋のベランダに、浩一さんがいるのを見ましたか？」

「うーん、ちょっと待って下さいよ」

山本さんは腕組みをして考え込んだ。そして、「そうそう、いらっしやいましたよ。私は奥様と話していた時、邸を背にしていたので、すぐには気づけなかつたですけど」

「そうですか。浩一さんも、お二人に気づいたようでしたか？」

「いえ、浩一様は、こちらを見ておられなかつたので、御存じない

と思います」

山本さんは腕組みを解いてそう言った。法子は、

「浩一さんは、どこを見ていたのですか？」

「旦那様のお部屋の方を見ておられたと思います」

山本さんの答えに、私はビックリして法子を見た。法子も私をチラッと見てから、

「浩一さんの部屋から、朝比奈さんの部屋の中は見えるんでしょうか？」

「さア、どうでしょうか。私にはわかりませんが……」

「そうですね。どうもありがとうございます」

と法子は応え、山本さんに会釈すると庭園を離れた。

「浩一さんに話を聞ければいいのにな」

私が言うと、法子は、

「浩一さん、いないわよ。ベンツがないから」

そう言えば、ガレージからベンツがなくなっている。浩一の車か。いつ出かけたのだろうか？

「とにかく、今日は一旦帰りましょう。明日また来ればいいわ」

法子が歩き始めた時、ベンツが門の方から走って来た。浩一が乗っている。

「あつ、グッドタイミングね」

私が言うと、法子は、

「そうね」

と微笑んだ。浩一は私達に気づき、ベンツを停めた。

「何か用かい？」

彼はウィンドウを開けながら、ブツキラボウに尋ねて来た。法子はすかさず、

「事件のあった頃、ペランダに出て朝比奈さんの部屋の方を見ていたのですが、何をなさっていたんですか？」

浩一の顔が陰しくなった。何でそんなこと知ってるんだ、というような目で、私達を睨む。そして目をそらし、

「君らには話す必要はないだろう」

「盗聴、ですか？」

法子が言うと、浩一はビクツとして彼女を見た。私もビクツリして法子を見た。

「何を言い出すんだ？ 失礼だぞ」

もう少しで浩一は車から降りて来そうだ。法子、あんまり挑発しないですよ。しかし法子は、そんな私の気持ちなんて全然知らない様子で、

「あのブランダの花、きれいですね」

と唐突に話題を変えた。おっ、彼女、何か仕掛けるつもりだな。浩一はキョトンとしたが、

「何が言いたいんだ？」

とまた険しい顔になった。法子はニッコリして、

「集音機を隠すには、ちょうどいい大きさの花ですね？」

「……」

何故か浩一は押し黙ってしまった。法子は追撃の手を緩めたりしない。

「何を聴こうとしたのですか？」

「そんなことはしていない」

浩一はブイと顔をそむけ、車をスタートさせようとした。法子はさらに、

「あの花の名前、御存じですか？」

と尋ねた。浩一はまたピクンとして法子を見た。そして、

「知らないよ」

「ご自分で買われたのに？」

「俺が買ったんじゃない。あれは……」

とそこまで言うと、浩一はハツとして口を噤んだ。これだ。法子の仕掛けた罠は、これだった。わざと間違ったことを言って、本人に本当のことを言わせる。浩一は見事に引っかけた。しかし、彼は途中でそれに気づき、口を閉ざしてしまった。

「お話できないような人からもらったのですか？」

法子はおとぼけを続けた。浩一はキツとして法子を見ると、

「君達は確か、警視庁の喜多島とかいう奴と知り合いだったな？」

「はい。それが何か？」

法子は尋ね返した。浩一は前に目を向けて、

「変に疑われるのは嫌だから敢えて言うが、あれは俺が今つき合っている女からもらったものだ。だから花の名前なんか知らない」

「そうなんですか」

浩一は再び私達の方を見て、

「だが、彼女は今度の事件にはいっさい無関係だぞ。もちろん俺もだ」

と言うと、ついにベンツをスタートさせ、ガレージに走り去ってしまった。

「今度こそ帰りましょうか」

法子は歩き出した。私が、

「結局、大したこと聞けなかったね」

と残念に思っけて口にする、法子は、

「そんなことないよ。いろいろわかったわ。あとは高林先生ね」

「えっ？ 高林先生？」

と私は尋ねてしまった。法子は私を見て、

「そう、高林先生よ。この事件の発端でもあり、最大の謎でもあるね」

私達がガレージに着いた時には、浩一はすでにそこにはいなかった。

私達は車に乗り込むと、朝比奈家をあとにした。

「ちょっと待ってて」

法子は道路の端に車を停めて外へ出た。

「どうしたの？」

と私も降りようとすると、

「すぐすむわ」

とスーツの内ポケットから携帯電話を取り出し、どこかに電話をし

た。どこに電話しているんだろう？ 彼？ まさかね。彼女は私に背を向けて小声で話しているので、会話の内容はわからなかった。「お待たせ」

私が下らない思いを巡らしているうちに、法子は車に乗り込んで来た。

「どこに電話してたの？」

「喜多島のおじ様よ」

法子はエンジンをかけながら言った。私は一瞬呆然としたが、「で、何を話したの？」

と尋ねた。すると法子はいたずらっぽく笑って、

「ヒ、ミ、ッ！」

「もう！」

そんなやりとりをしながら、私達は法子のアパートに向かった。

私がアパートでトーストをかじりながら牛乳のパックの口を開いているところに、いきなり法子がやって来た。

「ど、どうしたの、法子、こんな朝早くから？」

「早くもないでしょ。もう9時よ。今頃朝食？ それもトーストに牛乳だけ？ 栄養のバランス悪いわね」

と朝からお説教されてしまった。

「もう、朝から変なこと言わないでよ。それより、どうしたの？」

「早く着替えて！ これから朝比奈家に行くんだから」

「ええっ？ 何しに？」

「最後の謎を解くためによ！」

法子があまりせかすので、私はトーストを牛乳で流し込むようにして食べ、化粧も歯磨きもそこそこに着替えをすませると、彼女とともに朝比奈家に向かった。

「最後の謎って何？」

助手席でひきつりながら尋ねると、法子はクルクルとハンドルを回しながら、

「高林先生の行方よ。警察はまだ高林先生が生きているって考えてるみたいだけど、先生は間違いなく死んでるわ」

「死んでる！？」

私は舌を嚙まないように慎重に口を動かして言った。法子は頷いて、

「そう。いえ、正確には、殺されたって考えるべきね」

「殺された？ 誰に？」

「その答えを見つげるために、朝比奈家に行くの！！」

「きゃっ！」

車は大きくバウンドして、左右に揺れた。私は吐きそうになるの

を必死で堪えた。

私達はやがて朝比奈家に到着した。するとすでに警視庁の大型パトカーが来ていた。

「おはよう、法ちゃん」

庭園まで車を進めたところで、喜多島さんが現れた。法子はウィンドウを開けて、

「おはようございます、おじ様」

喜多島さんは、ちよつと困惑したような顔をして、

「法ちゃん、一体何が始まるのかね？ 所轄には内緒で、鑑識だけ連れて来てほしいなんて」

と尋ねた。法子はニコツとして、

「もし私の思い違いだと困るので、おじ様だけをお願いしたかったです」

と答えた。(もし仮に彼女に気がある男がこんなことを言われたら、嬉し過ぎて失神しているかも知れないな)そして、

「待ってて下さい。すぐ戻りますから」

と車をガレージに進めた。

「喜多島さんに何をやらせるつもり？」

私が尋ねると、法子は、

「高林先生を捜してもらおうの。どこにいるのかは、おおよその見当はついているんだけどね」

「えっ？」

私はビックリして法子を見た。高林先生は一体どこにいるんだろっ？

「さっ、行くわよ」

法子はスツと車を降りた。私もそれに続いた。

私達は喜多島さんのところまで歩いて行った。

「さて法ちゃん、これからどうするのかね？」

喜多島さんが尋ねた。法子は、

「プールに行きましょう」

「プールに？」

喜多島さんは一瞬キョトンとしたが、すぐにハツとなって、

「高林先生が沈んでいるというのか!？」

「そうです」

えーっ!？ 高林先生、プールに沈んでいるってどういうの!？

「どうしてそんなことがわかるの？」

私は驚いて尋ねた。すると法子は、

「わかるんじゃないくて、その可能性が高いってことなの。私の推理が正しければね」

「法ちゃん、君はどういう結論に達したんだね？」

喜多島さんが口をはさむと、法子は彼を見て、

「それは後でお話します。今はプールへ急ぎましょう」

「わかった」

私達は、庭園で呆然としてこちらを見ている山本さんを尻目に、プールへと向かおうとした。その時、

「一体何の騒ぎだ？」

浩一が二階の窓を開いて怒鳴って来た。喜多島さんはキツとして浩一を睨み、

「高林先生の搜索です」

「高林のオツ!？」

浩一はムツとして窓を閉め、姿を消した。どうやら降りて来るつもりらしい。

「さっ、おじ様、早く！」

法子は浩一に追いつかれてはまずいのか、喜多島さんを急ぎ立てた。

「ああ、わかった」

私達は少し小走りになって、プールに向かった。

プールはゴルフ練習場のネットを越えたところにある。私達はそ

ここまで辿り着くと、法子を見た。法子は脱衣所の脇にある制御室に入って行き、中を見回していた。

「何を探しているの？」

と私が覗き込んで言うと、法子は、

「プールの水を抜きたいのよ。排水口のスイッチがどこにあるのか探してるの」

と言いながら、いろいろな機械に目を走らせていたが、やがてそれらしいスイッチを見つけて、「開」のボタンを押した。

「あっ！」

私は制御室から出て脱衣所を抜け、プールサイドに出た。喜多島さんは私より早く、他の鑑識課員五人と共に中に入っており、水が勢いよくひけて行くのを眺めていた。その水はどす黒く濁っていて、中に何があるのか、全くわからなかった。

「警視、このプールに高林弁護士が沈んでいるって、確かなことなんでしょうか？」

鑑識の一人が尋ねた。喜多島さんはプールを眺めたままで、

「わからんよ。しかし、私もここに高林弁護士が沈められていると思う」

「はア」

鑑識課員はあまり納得していないようだ。まっ、喜多島さんは、法子の判断に絶対の信頼を置いているからね。他の人にはわからない、二人の関係ってやつよね。そんなところへ、当の法子がやって来た。

「法ちゃん、どうしてプールの中に沈んでいると考えたんだ？」

喜多島さんが振り返って尋ねた。法子はプールを見て、

「この事件をよく考えた上での結論なんです。犯人の意図は、死亡時刻を変えることであつたと考えています」

「死亡時刻をか。確かに水中に沈められていれば、死体の腐敗は空气中に比べて進行速度が遅くなる。そのためか」

「いえ、それだけではないんです。犯人は恐らく、死体を何重にも

包み、水中に沈められていた痕跡を残さないようにしたはずですが、水中にただ沈めたのでは、死亡時刻のトリックを簡単に見破られてしまうでしょうから」

とつけ加えた。喜多島さんはポカンとしていたが、

「ということは、犯人は後でプールから死体を引き上げるつもりだったのか」

「だと思いません」

法子がそう答えた時、プールサイドに浩一と礼子が入って来た。

「何をしているんだ!？」

浩一は、今にも掴みかからんばかりの形相で、喜多島さんと法子を交互に睨んだ。礼子はその後ろで、ニヤニヤして立っていた。喜多島さんは少しも慌てずに、

「プールの中に、高林弁護士 の 遺体 が 沈められている可能性がありません。今、それを確かめているところです」

「令状はあるのか？」

浩一は喜多島さんになおも食ってかかった。すると喜多島さんはスーツの内ポケットから令状を取り出して、

「ありますよ。きちんとね」

「……」

浩一は苦虫を噛み潰したような顔をし、引き下がった。彼もまた水のひけて行くプールに目をやった。

「なかなか見えて来ませんね」

鑑識課員が言つと、法子が、

「恐らく、遺体にはおもりがつけられていると思います。ガスがたまつて浮かんで来ないように」

と口にした。ゲツ。何か怖くなって来たなア。

しばらく沈黙が時を支配した。ただ水が流れる音だけが聞こえていた。

やがて。

「おつ、あれじゃないですか」

鑑識の一人が言った。喜多島さんも気づいたらしく、
「うむ。そうらしいな。よし、引き上げよう」

と鑑識課員に指示し、どす黒い水の中に少し見えて来た黒いビニール袋のようなものの捕獲作業に取りかかった。

「あの中に高林先生が？」

私がオツカナビックリ法子に尋ねると、彼女は、
「たぶんね」

とプールの方を見たままで答えた。私はチラッと浩一達を見た。浩一はプールサイドの端まで下がっており、礼子に至っては脱衣所から外に逃げ出していた。私も怖くなり、後ずさりした。しかし法子は動じることなく、プールを見ていた。

「こいつは……。厚手のビニール袋に包まれていますね。結構丈夫だな」

と鑑識の人の声が出た。私はすでにプールの方から視線を外し、背中を向けてしまっていたので、とても見ることもできない。

「気をつける。破れないように引き上げるんだ」

とは喜多島さんの声。どうやらロープをうまく使って、袋ごと持ち上げるつもりらしい。

「よし、うまいぞ」

ドサツという音がした。プールサイドに高林先生の遺体が置かれたようだ。礼子の姿はすでになく、浩一も外に出ていた。私も逃げ出したいのだが、足が動かない。

「よし、袋の口を縛っている紐を解け。袋は破損しないようにな」
スルスルと袋が引き剥がされたようだ。やはり怖くて見られない。

「三重に包まれていたな。なるほど、適当な大きさの石を入れて、一緒に沈めたのか。遺体は全く濡れていない。それから、衣服は脱がされて下着姿か」

と喜多島さんが言うと、法子が、

「死後硬直が完全に全身に行き渡っていますね。どれくらい経っているんでしょうか？」

と尋ねた。ひーっ。法子、見てるの、遺体を？ そう言えば、法子のお母さんの実家って、お寺だっけ。でもあまり関係ないか。

「うーん。水中に沈められていたからね。遺体内部の化学変化がかなり遅くなっていると考えられるから、本来なら一日か二日と言いたいところだが、それより前かも知れないよ」

えっ？ 喜多島さん、でもそれだと……。喜多島さんももちろんその矛盾に気づいていた。

「ということは、高林弁護士は、朝比奈さんが殺される前に死んでいたのか」

喜多島さんは大きく溜息を吐き、

「法ちゃんはわかっていたのか？」

と尋ねた。法子は、

「いいえ、わかっていたわけじゃありません。ただ、推理によって組み立てたものを確かめたら正解だったということですよ」

と答えた。そして、

「これで犯行の手口も犯人もはっきりわかりました。邸に行きましよう、おじ様」

「あ、ああ」

喜多島さんは呆然としていたようだった。

読者諸氏への挑戦

さて、犯人特定に必要な情報の全てが出揃いました。犯人は誰か、そして犯行の手口は？ もしお嫌でなかったら、考えてみて下さい。

法子は、「犯行の手口と犯人がわかった」と言った。ということ
は、彼女はあのいくつかの謎を全てクリアして、その上で犯人を特
定し、なおかつ犯人がどうやって翁を殺したのか見抜いた、という
ことになる。

私達は取り敢えず朝比奈家の居間に行った。喜多島さんが浩一や
礼子、それに裕子先輩と松子、山本さん、三池さん呼び集めた。
「何が始まるんだ？」

浩一はソファに座りながら毒づいた。礼子はムスツとした顔で私
達を睨み、浩一とは反対側のソファに座った。先輩と松子はソファ
のそばに立ち、山本さんと三池さんは、部屋の隅のドアの近くに立
っている。

「この事件の犯人がわかりました」

法子が一同を見渡す位置に立って言った。浩一はピクンと眉を釣
り上げ、

「犯人がわかったア？」

といかにも疑っているという目で法子を見た。裕子先輩は悲しげに
私達を見ており、松子は相変わらずおどおどしている。

「一体誰なのよ、犯人は？」

礼子は先輩をチラツと見て言った。先輩はそんな礼子を無視して
いた。礼子もそれに気づいてムツとし、

「もったいぶらないで早く言いなさいよ！」

と法子に目を向けた。法子はそんな礼子の言葉など聞こえなかつた
かのように、

「朝比奈さんは、一昨日、すなわち、10月10日の午後2時30
分から3時30分くらいにかけて、殺害されました。犯行の手口は、
睡眠薬を飲ませ、眠らせて背中に短剣を突き立てる、というもので
す。そして、その犯行を唯一なし得た人物が、現場にいました」

「だから誰なのよ!?」

礼子は苛立つて言った。法子は礼子をチラッと見てから、

「それは高林先生です」

「でも、高林は死んでいたんだらう? 親父より早くさ」

浩一が口をはさんだ。法子は浩一の方を見て、

「そうです。高林先生は、さきほど死体で発見されました。死体の状態と気温、水温から考えて、死後3日から4日は経っているようです」

「ということは、今君が言った、高林が犯行をなし得た唯一の人物だというのは、誤りだな」

浩一は嘲笑して言い放った。しかし法子はニコツとして、

「そうですね。先に死んでいた高林先生に朝比奈さんを殺すことはできません。ということは、私達が見かけた高林先生は、高林先生ではなかった、ということになります」

と言った。途端に居間全体に緊迫した空気が立ち籠めた。てことは、あれが真犯人? でも変よ。

「だが、裕子は高林だと思ったのだらう? 気がつかなかったのか?」

浩一が先輩に尋ねた。裕子先輩は浩一に目を向けて、

「私、あの時コンタクトレンズをしていなかったから、高林先生の顔ははつきりわからなかったのよ」

と答えた。浩一はギョツとして法子を見た。法子は軽く頷いて、

「そうです。裕子先輩は、朝比奈さんに『高林先生を出迎えるように』と言われたので、白髪に白いヒゲをあしらった人物を、高林先生と思い込んでしまったのです」

「えっ? 法子さん、それどういうこと? それじゃ、父が……」

と先輩が言いかけると、法子はそれをさえぎるように、

「そうです。朝比奈さんが高林先生になりました人物と共謀して、高林先生が10月10日まで生きていたように見せかけたのです。

あの日、警備員が門のところになかったのは、そのためです。警

察に事情聴取された時に、勤務していなかったのでわからない、と証言させるために」

裕子先輩は、驚きのあまり声が出ない。浩一と礼子は思わず顔を見合わせていた。松子は倒れ込むようにソファに座ってしまった。

「わけがわからないな。どういうことだ？」

浩一がやつと口を開いた。法子は浩一に目を向けて、

「つまり朝比奈さんが、先輩の作った予告状を私に送り、この事件のきっかけを作ったのです。しかし、朝比奈さんの計画は失敗に終わりました」

と答えた。礼子が次に口を開いた。

「犯人は誰なのよ!？」

彼女はさつきからこればかりだ。こういう性格は、推理小説を買って来て読み始めても、途中で解決編を読んでしまうタイプだ。法子は礼子に目を転じて、

「その前にいくつか解決しておかなければならないことがあります」と言い、さらに、

「まず、犯人が誰なのか考える前に、この事件に関するいくつかの疑問について解決しておきます」

と一同を見渡した。

「朝比奈さんが殺された現場には、飲みかけのコーヒーと全く口をつけていない紅茶があり、キャビンマイルドとハイライトの吸い殻がありました。しかも、この吸い殻はかなり乾燥していて、灰も細かくなっており、とても何時間か前に吸われたモノには見えませんでした。でも、吸い殻からは、それぞれ朝比奈さんと高林先生の血液型と同じ血液型が採取されました」

浩一は何かを言いたそうにしているが、口を開かないでいるようだ。法子は続けた。

「この吸い殻は、朝比奈さんが、高林先生が10月10日まで生きていて、煙草を吸って行ったと見せかけるために用意したモノでしょう。恐らく、高林先生が10月 8日に吸ったモノだと思います」

す

すると、喜多島さんが、

「つまり高林先生は、10月 8日に朝比奈家に来て、帰らぬ人となった可能性が大だということだね？」

と初めて口をはさんだ。法子は喜多島さんを見て頷き、

「そうです。いえ、そうだと思います。高林先生の死亡の日時については、確証は得ていませんから」

それから再び一同を見渡して、

「そして、朝比奈さんと一緒にいたはずの高林先生、すなわち本事件の真犯人は姿をくらし、朝比奈さんは背中に短剣を突き立てられて、殺されてしまいました」

と続けた。浩一は相変わらず何か言いたそうだが、何も言わない。

礼子はムスツとしており、松子と裕子先輩は悲しそうに顔を見合わせている。法子は一息ついてから、

「その短剣には刃がついていないため、犯人は何かで短剣の柄を叩き、まるで杭のように打ち込みました。何故そんなことをしたのでしょうか？」

と尋ねるように一同を見た。浩一が、

「持ち主に罪を着せるためだろうか？」

と答えた。法子は軽く頷き、

「それもあります。しかしもう一つあるのです。それは恐らく憎しみ。そして、恨み。犯人の朝比奈さんに対する憎悪の念がこめられている気がします」

裕子先輩の顔が蒼くなっているのがわかった。松子は心配そうに先輩に声をかけている。

「さらに犯人は、短剣を突き立てて絶命させた後、朝比奈さんを鉄の棒のようなモノで殴っているのです」

法子のその発言に、浩一と礼子もギョツとしたようだった。犯人の恐ろしさを感じたのだろうか？

「ここでまた新たな疑問が生じました。短剣を打ち込んだもの、そ

して朝比奈さんを殴ったものは何で、一体どこにあるのか？　そして犯人はいつそのものを現場に持ち込み、どうやって持ち去ったのか？」

法子の話に、居間の一同は完全に引き込まれていた。あんなに批判的な態度だった浩一も、顔つきが変わっている。礼子も同じだ。法子はそんな目を知ってか知らずか、全く変わらない調子で、

「さて、もう一度高林先生が来てからのことを考えてみましょう。

裕子先輩は先入観とコンタクトレンズを着けていないことから、犯人の変装と気づかず、高林先生だと思い込んでいた。そして、私達は廊下を歩いている高林先生らしき人物の後ろ姿を見ているだけですし、浩一さんが朝比奈さんの部屋に行った時も、高林先生の後ろ姿を見ているだけで、顔も声も確認していません」

「つまり、誰も高林弁護士だと確認していないということか」

喜多島さんが独り言のように言った。すると浩一が、

「じゃあ何で親父は殺されたんだ？　そいつは共犯者だったんだろう？　高林が生きていると見せかけるための？」

と尋ねた。法子は頷いて、

「そうです。私は最初、高林先生が犯人で、共犯者がいるのでは、と考えました。でもそれだと、何故朝比奈さんが殺されてしまったのか、わからないのです。睡眠薬が入っていたのはコーヒード、高林先生用に出されたのは紅茶です。高林先生が出された飲み物をすり替えようとしても、それができないのです。ということは、どういうことなのか？」

と言葉を切り、意味ありげに目を伏せた。途端に緊張感が辺りを支配した。もう、法子ったら！　と思っていると、彼女は再び目を上げて、

「朝比奈さんが何かを企んでいるようなのは、最初に予告状を見せた時の反応でわかりました。何かあるなと思いました。ところが、やって来た高林先生が姿を消し、朝比奈さんが殺された。予告状を私宛に出したのが朝比奈さんの可能性が高いとすると、どうして事

件を仕組んだはずの朝比奈さん本人が殺されてしまうのか？」と続けた。そこで彼女は後れ毛を耳の後ろにかき上げて、

「この二つの疑問を解消する答えはただ一つ。高林先生は本人ではなく誰かの変装で、朝比奈さんを殺す準備をして来た、というものです。変装して来た人物が、朝比奈さんを眠らせるためにモルヒネを持って来ていれば、朝比奈さんのコーヒーに入れることができます。そして、事件を仕組んだ朝比奈さんが殺されるという矛盾も解けるのです」

裕子先輩が潤んだ瞳で法子を見て、

「じゃあ法子さん、高林先生を殺したのは……父だというの？」

と尋ねた。一同の視線が法子に集中した。法子は悲しそうに頷き、「そうです。そのために朝比奈さんは私に予告状を出し、邸に来させたのです。高林先生を目撃させるために」

「そんな……」

先輩は下を向いてしまった。肩が震えている。泣いているのだ。私ももらい泣きしそう。でも法子は続けた。

「そして、朝比奈さんが考え出した高林先生の死亡日時のとリックの舞台上上がった犯人は、その舞台を乗っ取り、台本を書き換えてしまったのです」

先輩はもう一度顔を上げ、法子を見た。喜多島さんも、ジツと法子の話に聞き入っている。

「朝比奈さんは全く予期せぬ台本変更で、眠らされた上、殺されました。そして犯人は朝比奈さんの部屋から消え、凶器を打ち込んだものも、未だに特定できません」

法子は窓に近づいてから振り返った。太陽の光が、彼女の髪、特にポニーテールの部分をキラキラと輝かせている。

「事件を検証してみましよう。今までの話で、犯人は高林先生に変装した誰か、ということに異論はないと思います」

法子は私達を見回して言った。誰ともなく、頷く。法子も軽く頷き、

「では、誰が犯人たり得るのでしょうか？　まず、先輩を除外します。先輩は高林先生に変装した人物に会っており、私達もその直後に高林先生らしき人物の姿を目撃し、なおかつ先輩にも会っていないです」

裕子先輩は、ホツとした表情になった。法子はさらに続ける。

「それから、浩一さんも除外します。裕子先輩が朝比奈さんの部屋を出た直後に、浩一さんと会っているからです」

浩一はニヤツとした。礼子は不服そうだ。法子は再び部屋の中央に歩いて来て、

「次に三池さんを除外します。三池さんは犯行時刻、キッチンにいました。裕子先輩の悲鳴が聞こえて、私達が廊下に出たところに姿を現しています。考えようによっては、犯行は可能かも知れませんが、高林先生が現れる直前までキッチンにいたのですから、変装して朝比奈さんに会い、殺害し、再びキッチンに戻って仕事を始めるのは、まず時間的に不可能でしょう」

三池さんは、自分が容疑者の一人として法子に扱われていたことに、ちよつとびっくりしているようだ。礼子の顔が険しくなった。

「な、何よ！　私はどうなのよ！？　私が犯人だとも言うの！？

」

彼女は立ち上がり、法子に怒鳴った。法子は礼子を見て、

「いいえ。貴女は犯人ではありません」

と答えた。礼子は引きつった顔で笑い、

「そ、そう。それならいいのよ」

と言ってソファに戻った。しかし法子の次の一言は強烈だった。

「高林先生になりすました人物は、きつと朝比奈さんに信用されていた人物でしょうから」

礼子はまたムツとしたようだったが、何も言わなかった。

「つまり、朝比奈さんは共犯者を信用し切っていたのです。だからこそ、モルヒネ入りのコーヒーもあっさり飲んでしまったのです。事件の被害者は高林先生だとばかり思っていたでしょうから」

法子が一息つくくと、喜多島さんが、

「法ちゃん、今の話の進み具合で行くと、あとは松子さんと、山本さんだけだが？」

と尋ねた。法子は喜多島さんを見てから、

「そうですね。では、お二人についても、検証してみましよう」と言い、山本さんを見た。

「山本さん、庭園で奥さんと話した時、浩一さんがベランダに出ているのにすぐに気づきましたか？」

と法子が尋ねると、山本さんは不思議そうな顔をして、

「いいえ、私は邸に背を向けて、庭園の雑草を刈っていたので、奥様がお声をかけるまで、浩一様がベランダにおられることは気づきませんでした」

と答えた。何故そんなことを聞かれたのか理由がわからない、という顔だ。次に法子は松子に目を転じて、

「奥さんにお尋ねします。その後、貴女は居間の前の廊下で私達と会いましたよね？」

「はい、そうです。それが何か？」

「貴女は、外から戻って来られたのですよね？」

法子はまたしても不可思議な質問をした。松子は当惑したような顔で、

「はい。確かにそのとおりですけど」

と答えた。法子はさらに、

「それから、律子が、『浩一さんはどうしたのかしら？』と言っ

た時、貴女は、『浩一さんはご自分の部屋に戻られた』とお答えになりましたよね？」

「ええ、そうですわ」

松子はますます不思議そうな顔になる。法子はそこで突然浩一を見て、

「浩一さん、貴方はよくベランダに出られますか？」
と尋ねた。浩一は法子に目を向け、

「そんなに出たりはしないよ。ごく稀に出るだけだ」

と答えた。法子は満足そうに頷くと、

「わかりました」

と言い、再び山本さんを見た。

「浩一さんがベランダに出ているのに先に気づいたのは貴方ですか、それとも奥さんですか？」

山本さんは突然の質問に一瞬呆然としてしまったが、

「ええ、確か奥様だったと思います」

法子、一体何を導き出したいのよ？

「何が言いたいんだね、法ちゃん？」

喜多島さんがたまりかねたように言った。しかし、法子はそれをまるで無視して、

「浩一さん、貴方は事件当日、部屋に戻ってベランダに出る前に、どこにいましたか？」

と質問を続けた。浩一は少々ビクつきながら、

「親父の部屋だよ。だけどな……」

と何か弁解しようとしたが、法子がそれを遮った。

「朝比奈さんの部屋から、そのままご自分の部屋に戻ったのですかね？」

「そうだよ」

「その間、どれくらいの時間かかりましたか？」

法子の質問は、まさしく用意されていたかのごとく、流れるように続いた。

「イライラしながら戻ったから、どれくらいかかったのが正確にはわからないが、10分とかからなかったと思うよ」

「では、部屋に戻ってから、ベランダに出るまでにかかった時間はどれくらいですか？」

法子のその質問に浩一の顔色が変わった。彼は、絞り出すような声で、

「そ、その話はやめてくれ……」

と法子から視線を外して言った。しかし法子はニツコリして、
「大丈夫です。今問題にしたいのは、そのことではありませんから。
かかった時間を教えて下さい」

と言葉を返した。浩一は再び法子を見て、

「15分くらいかな……」

と答えた。喜多島さんが何か言いかげようとしたのを法子が気づいて、

「おじ様、もう少し待って下さい。あといくつか質問をすれば、私
が何故こんなことを尋ねているのか、おわかり頂けるでしょうから
と言った。喜多島さんは不承不承頷いて、引き下がった。法子も頷
いてから浩一を見て、

「では、ベランダに出ていた時間はどれくらいですか？」

「15分くらい……。いや、10分くらいかな……」

素直に質問に答える浩一を、礼子は非常に意外そうに見ていた。
彼が何故法子の質問に従順なのか知らないから、とても信じられな
いのだろう。

「奥さん、もう一度お尋ねします」

法子は松子を見た。松子も法子を見て、

「はい。何でしょうか？」

と応えた。法子は真顔になって、

「律子の言葉に、貴女は、『ご自分の部屋に戻られた』と浩一さん
のことをお答えになりましたよね？」

「はい」

「どこから戻ったとおっしゃりたかったのですか？」

「……」

松子の顔色が変わった。えっ？ そんな、まさか、法子が犯人で
思っているのは……。

「質問を変えます。何故外から戻った貴女が、浩一さんが自分の部
屋に『戻った』とおわかりになったのでしょうか？」

と法子が言うと、松子は、

「それは庭園から浩一さんがベランダにいるのを見かけたからです」
「それなら、『浩一さんはご自分の部屋におられる』でいいのではないですか？」

法子の執拗なまでの問いかけに、松子はキツとなった。

「そんな、言葉尻を捕らえて人を困らせて、楽しいのですか？」
彼女らしからぬ、強い口調だった。法子は微笑んで、

「そうではありません。人は無意識に自分の知っていることを織り交ぜて、話をしてしまうものなのです。貴女もそうなのですよ、奥さん」

松子の顔色がさつき以上に変わった。法子は続けた。

「貴女は、浩一さんが朝比奈さんの部屋に行き、そこで朝比奈さんに怒鳴りつけられ、憤慨して自分の部屋に戻ったのを知っていたから、『戻られた』という言葉が出てしまったのです」

「……」

松子は黙ったまま法子を正面から見つめている。法子も松子をジッと見つめ返して、

「何故知っていたのか？ それは、貴女が高林先生に変装して、朝比奈さんの部屋にいたからです」

と強い調子で言った。私を始め、その場にいた者はことごとく仰天していた。ただ一人、犯人と名指しされた松子を除いて。

「だからこそ、貴女は、浩一さんがベランダにいるのにも気づくことができたのです。そして、後で話の辻褄が合わなくなるのを防ぐために、貴女はわざと山本さんに話しかけ、浩一さんに気づいてみせたのです」

法子の推理は続いていたが、松子は全く動揺していなかった。むしろ、冷めていたと言っていたいいかも知れない。

「貴女は高林先生の死亡時刻のトリックの片棒を担ぐふりをして、それを逆手にとり、コーヒーにモルヒネを入れて朝比奈さんを眠らせ、裕子先輩の部屋から持って来た短剣を朝比奈さんの背中に突き立てた。そして、あるものを使って、それを打ち込んだ」

「あるもの？ 何？」

「私は思わず口をはさんだ。法子は私を見て、

「灰皿よ。灰皿をハンカチかタオルのようなものに包んで、それをカナヅチ代わりにして、短剣の柄を叩いたのよ」

「そっか。だから灰が細かく砕けてたのね？」

「そういうこと」

法子は再び松子を見た。

「こうして朝比奈さんは殺されました。そして貴女はゴルフクラブで朝比奈さんを何回も殴った。死してなお許せない程の恨みがあったのですね」

法子がそう言うと、松子は、

「続けて下さいな」

と思わぬことを口にした。法子は小さく頷いて、

「その後貴女は高林先生の変装を解き、自分の服に着替えるとクラブを練習場に戻し、そのまま庭園に現れたのです」

と言った。松子は微笑みすら浮かべて、法子の話を聞いていた。法子はさらに、

「朝比奈さんが信用しており、高林先生殺害の協力をさせ、なおかつ、自分の命を狙っているとは夢にも思わない存在。それは貴女以外にはおられないのですよ、奥さん」

とまるで諭すように言ったが、松子の反応は法子の気持ちを無視したものだ。た。

「証拠がありますの？ 私が主人を殺したという？」

その言葉は、開き直りともとれた。法子の指摘は、松子を状況的には犯人と推定させるに足るだけのものではあったが、物証がない。松子の開き直りにも、ある意味では頷けないこともない。法子の話は、きつい言い方をすれば、机上の空論なのだ。ところが法子は、さらにこう言った。

「貴女がそうおっしゃるのは、予測していました。貴女が遺留品の隠し場所に絶対の自信を持っているのも、わかっています。だから

こそ、それほど冷静でいられるのですよね？」

松子の微笑みが消えた。彼女は明らかに狼狽していた。法子はここで喜多島さんを見て、

「おじ様、高林先生の着ていた衣服は、恐らく朝比奈さんの部屋のクローゼットの中です。朝比奈さんの服に紛れてハンガーに掛けられているはずですよ。探してみてください」

「わかった」

喜多島さんは鑑識課員に指示し、搜索を開始させた。

「……」

松子の顔は、見る見るうちに青ざめて行った。彼女は、

「私の負けね。貴女は、私に遺留品を処分する時間がないことを見抜いていたのね。だから、浩一さんに細かく時間のことを尋ねていたのね」

と自嘲するように言った。法子は再び松子を見て、

「ごめんなさい、今のはハツタリです。貴女が開き直ることは予測していましたが、遺留品をどこに隠したのかまでは、わかりませんでした。だから、カマをかけたんです」

と口にした。そして、

「要するに、私は貴女が自白してくれなければ、貴女を犯人と指摘できるだけの証拠を手に入れてはいませんでした」

と微笑んで言った。すると、松子も微笑み返して、

「ありがとうございます」

と妙に晴々とした調子で言い添えた。

「裕子先輩のコンタクトレンズを隠して、私のアパートに予告状を届けたのは貴女ですね？」

法子が尋ねると、松子は、

「ええ、そうよ」

と実に素直に応じた。法子はニコツとして、

「やっぱりそうでしたか。私のアパートには男の人は親族以外近づけないんです。郵便配達の人も女性のみなんですよ」

あつ、そうか。だから法子は、「朝比奈さんが予告状を出したとは限らない」って言ってたのか。

「あれが朝比奈への最後の奉公でしたのよ」

松子は唐突に言った。法子はキョトンとして彼女を見た。松子は作り笑いをして、

「朝比奈は、私を愛してはいませんでした。あの男は、私に亡くなった江威子さんを見ていたのです。私は私として愛されたことがありませんでした。いつもあの男は私ではなく、江威子さんを見ていたのです」

と話し出した。裕子先輩がハツとして松子を見た。

「朝比奈に最初に結婚を迫られた時は、正直言っただ嫌でした。私の父親より年上の男と結婚するなんて、恐ろしかったのです。でも次第に朝比奈の愛の深さを知り、私自身も惹かれて行きました。でもそれは、錯覚でした」

松子の目に涙が浮かんでいた。

「朝比奈が愛情を注いでいたのは、私ではなく、私の後ろに見える江威子さんにだったのです。私を抱いている時も、朝比奈は、『江威子』と呟いていました」

私は何か気恥ずかしくなり、赤面した。

「そうしているうちに、私は昔のことを思い出しました。一生懸命忘れようとしていた忌わしい過去を、あの男が思い出させたのです」
一同の視線は、ますます松子に集中した。

「10年前まで、私は、小さい会社でしたが、その社長の娘でした。それが、同じ土地に進出して来た朝比奈グループの子会社のせいで、業績不振に陥り、莫大な赤字を抱えて倒産してしまいました」

松子の目は悲しみに満ちていた。さっきのあの晴々とした表情は、完全に消失していた。

「企業の盛衰は仕方のないことです。経営者の手腕のせいかも知れません。しかし、父の会社が倒産したのは、朝比奈長次郎の汚い裏工作の結果でした」

裕子先輩がピクンと身体を動かして松子を見る。松子は続けた。

「父の会社の信用を失墜させるような情報を流し、金の力で官僚に働きかけ、父の会社が行き詰まるように仕組んだのです」

法子も黙って松子の話に耳を傾けている。

「父は絶望し、自殺しました。母はそのショックで寝込んでしまい、一年後に亡くなりました。一人残された私は、父の会社を倒産に追い込んだ朝比奈グループの子会社に、他の社員と共に移り、朝比奈に対する憎しみをおし隠して、勤めを続けました」

松子は目を伏せて、

「そして年月が経つうちに、私は父母のことを少しずつ忘れられるようになり、朝比奈グループに対する憎しみも、過去のものとなっ
ていきました。そんな時、朝比奈長次郎と出会ったのです。その時の私は、朝比奈に対する恨みを忘れていました。いえ、今にして思えば、忘れようとしていたのかも知れません」

と言い、言葉を切った。何か込み上げるものがあるのか、彼女はしばらく俯いたままでしたが、やがて、

「でもあの男と結婚し、あの男が私ではなく、私の後ろに見える江威子さんを愛しているのだと知った時、過去の記憶が昨日のことのように甦り、また朝比奈のことを憎むようになったのです」

と目を上げて言った。そして裕子先輩を見て、

「裕子さん、おわかりになる？ 自分が亡くなった女の身替わりではないと知った時の気持ちか？ 私は人間ではなく、人形だったのよ。江威子さんにそっくりなね」

と言った。しかしその言い方に非難めいたところはなかった。いやむしろ、自嘲するかのような口調だった。

「それは違うわ、松子さん」

先輩が口を開いた。松子はハツとして、

「えっ？ どういうこと？」

先輩は松子の隣に座り、

「父は、貴女に申し訳ないことをしたと言っていたわ。貴女が自分

のしたことでどれほど辛い目にあって来たのか、知っていたの。だからこそ、貴女を迎えて、その罪を少しでも償おうとしていたのよ」

と言った。そしてさらに、

「それなのに、私の母にそっくりな貴女を、貴女として愛せないことは、とても悪いことだ、と……」

松子は驚いたようだった。裕子先輩はさらに続けた。

「そして父は、自分自身、私の母から逃れられないのを悲しんでいたわ。それは父にとっても、母にとっても、いいことではなかったから。だからこそ父は、貴女を別の女性として見ようと努力をしていたのよ、松子さん」

「そんな……。そんな素振り、少しも見せてくれなかった……」

松子は頭を振って言った。裕子先輩は少し笑みを浮かべて、

「父は不器用な人だったのよ。自分の考えを他人に伝えるのが苦手だったわ」

と回顧するように言った。そして、

「こんなことになってしまいう前に、私がもっと松子さんと話し合うべきだったのね」

と涙をこぼした。しかし松子は、

「そんな……。そんなこと、信じられないわ！！　嘘よ。いい加減なこと、言わないで！」

と叫んだ。そして、スツと立ち上がると、

「あの男は、私の父と母を殺したの。そう、殺したのよ！　そんな男に、他人を思い遣る気持ちなんて、あるわけないじゃないのオツ！」

と半狂乱状態で怒鳴り散らし、テーブルに突っ伏して泣き出してしまった。

「松子さん……」

裕子先輩の目は、慈愛に溢れていた。自分のことを犯人に仕立てようとした人間に対して、この人は何て優しい顔をするのだろう。

私は先輩を改めて尊敬してしまった。

やがて、鑑識課員達が高林先生の着衣を朝比奈さんのクローゼットから発見し、松子の犯行が裏付けられて、喜多島さんが所轄に連絡した。

八王子署から森尾さん達が到着し、松子に手錠が掛けられたのはそれから30分程経ってからだった。

「裕子さん」

松子は玄関の前に横付けにされたパトカーに乗り込む直前に言った。先輩は松子を見て、

「はい」

と応じた。松子は作り笑いをして、

「私、今でも後悔していないわ。貴女のお父様を殺したことをね」と言い、パトカーに乗り込んだ。

「父のせいで、あの女は犯罪者ひとになってしまったのね」

走り去るパトカーを見て、先輩は呟いた。すると法子が、

「人が犯罪者になるのは、他人のせいじゃありませんよ。全て自分のせいです」

と口にした。裕子先輩はチラッと法子を見て、

「そうね。そうだね」

と応えた。

朝比奈家の事件から、一週間が過ぎた。私達は、いつもの生活に戻り大学に通っていた。

「早いものね。もう一週間経ったのか」

私が独り言のように言うと、法子は、

「そうね。でも先輩、まだ大学に出て来ないわね」

「ええ。お父さんが殺されて、犯人が義理のお母さんだなんてね。とんでもないわよね」

「うん」

法子はこの一週間ずっと沈んでいた。自分はとんでもないことをしてしまったのではないかと考えているのだ。彼女は事件に関わってそれを解き明かした後、大抵そういう心理状態になってしまう。冷たい言い方をすれば、関わりなきやいいじゃん、となってしまうが、それでは彼女に酷すぎる。

私自身は法子がしたことを間違ったことだとは思っていないし、松子のためにも裕子先輩のためにも、ああするしかなかったと結論を出している。全てうまくいくなんてことは現実にはあり得ないはずだ。

私達は別に疲れたわけでもなかったが、何となくロビーの長椅子にベタツと座ってしまった。その時、

「中津さん」

と声をかけて来た人がいた。私達は、ハツとして声の主を見た。そこには大崎先生が立っていた。

「ちょっといいですか？」

彼は法子の隣に座った。もう！ どうしていつもそうなの！？
うん？ でもそういう話ではなさそうだ。

「事件のことですね」

法子が尋ねると、大崎先生はゆっくりと頷き、

「松子さんは、とうとうモルヒネの出所を話さないまま、送検されるそうですね」

「ええ。やはりあのモルヒネ、出所は大崎先生なんですね？」

と法子が言ったので、私はびっくりして大崎先生を見た。法子は、「でも、それは大崎先生が渡したものではない。松子さんが勝手に持って行ったものですね？」

大崎先生は天井を見上げて、

「ええ。しかし、実際の話、私は彼女がモルヒネを私の研究室から持って行ったのを知っていました。見て見ぬフリをしていたのです」
「松子さんを愛していたのですね？」

法子が単刀直入に言うと、大崎先生は苦笑いをして、

「はい。でも、彼女は私を利用してに過ぎませんでした。私の片思いですよ。それはそれでいいのですが……」

なるほど。だから法子がモルヒネのことを尋ねた時、あんなに動揺したのか。

「貴方はどこまで御存じなんですか？ 高林先生のことも？」

法子が尋ねると、大崎先生は法子を見て、

「高林先生の死亡時刻のトリックは、彼女の発案です。可能かどうか、私に質問して来ました」

法子は冷静に聞いているが、私はもう少しで、「どうして警察に言わなかったんですか!？」と叫びそうになった。

「何故朝比奈さんは高林先生を殺したのか御存じですか？」

法子は静かに尋ねた。大崎先生はフーツと息を吐いてから、

「高林先生は、遺言状のことをネタに、朝比奈さんを脅迫したらしいのです。朝比奈さんはカツとなり、高林先生をゴルフクラブで殴り殺した。最初は警察に話すつもりだったらしいのですが、松子さんがそれを止めて、例のトリックを話したのです」

「何故松子さんはそんなことを思いついたのですか？」

法子は大崎先生を覗き込むようにして言った。先生は、法子の顔がすぐそばにあるので、ちょっと照れたような顔で、

「松子さんは、朝比奈さんとの離婚を考え、トリックを提案したのです。うまくいったら、離婚を承諾してほしいと。しかし、朝比奈さんは離婚に応じませんでした」

「それで朝比奈さん殺害を思い立ったのですか？」

「恐らく……」

大崎先生は目を伏せて、切なげに言った。しかし法子は、「それは違うと思います」

と反対の意を表した。大崎先生はびっくりして目を上げた。

「どういことですか？」

彼は不思議そうに法子に尋ねた。法子は、

「松子さんは貴方の愛に気づいたのではないですか？ だからこそ、貴方の愛に応えるために、朝比奈さんとの離婚を考え、それがかなわないとわかったので、殺人まで思い立った……」

と続けた。大崎先生は、信じられないという顔で法子を見ていた。

「そんなバカな……。彼女は、私を単に便利な奴として……」

「松子さんがそう言ったわけではないのでしょうか？」

法子が促すように言うと、大崎先生は、

「そ、それはそうですが……」

と俯いてしまった。法子はニッコリして、

「だからこそ、逮捕されてから今まで、貴方のことを警察に話していないのではないのでしょうか」

大崎先生は、ゆっくりと顔を上げて法子を見ると、

「私はどうすればいいのでしょうか？」

法子は微笑んだまま、

「松子さんを本当に愛しておられるのなら、待つてあげることです。彼女が帰って来るのを。裕子先輩が、被告人側の証人として、松子さんの減刑を申し立てると言っていましたし」

「裕子さんが……」

大崎先生の目に涙が光っていた。彼はしばらくじっと何かを考えていたが、やがて立ち上がり、私達に深々とお辞儀をすると法学部

棟を出て行った。

これは後で知ったことなのだが、大崎先生は八王子署に出頭し、松子にモルヒネを提供したのは自分だと名乗り出たそうだ。少しでも松子の罪が軽くなるように。

「朝比奈さんは、松子さんの計画に気づいていたんじゃないかしら」
法子が突然話し始めた。私はその内容に仰天して、

「ど、どうということよ？」

法子は私を見て、

「先輩の話を聞いてから、ずっとそうじゃないかって思ってたの。

朝比奈さんは、松子さんへの罪滅ぼしのために、敢えて松子さんの計画に乗ってあげたんじゃないかってね」

「自分が殺されるのを知っていて？」

「そう。全て承知の上で。今となつては、真相はわからないけどね」
「……」

今度は私が、沈んでしまいそうだった。

「講義が終わったら、先輩に会いに行こうか」

法子は明るく言った。私も、

「うん、そうしよう」

と明るく応えた。法子はニッコリした。そして、

「ほら、早くしないと、また英語、一番前の席よ！」

と立ち上がった。私は一気に現実に引き戻されて、

「そ、それだけはもうゴメンよオッ!!!」
と走り出した。

END .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2430f/>

殺人予告者

2011年7月2日03時25分発行